

B50.41
90
1-5

A193A05
5

大東亞建設民族人口資料五
昭和十七年二月二十日

東亞共榮圈内主要民族略説(其ノ二)

インドネシア・オーストラリア海民族

暫定稿

厚生省人口問題研究所

目次

第一篇 インドネシアの民族事情

一 民族移動

二 人種系統

三 言語關係

四 體質特徴

五 生産様式

第二篇 濠洲の民族事情

一 人類學より見たる濠洲原住民

(一) 原始民族としての濠洲土人

(二) 言語分類

(三) 體質特徴

(四) 文化様式

三、濠洲發展史

(一) 囚人國としての濠洲

(二) 自由移入民の流入と開拓

(三) 濠洲聯邦の樹立

(四) 白濠政策を廻る問題

(五) 大戦及戦後の濠洲

三、オーストラリアと東洋移民

(一) 白濠政策の立法外交小史

(二) 白濠政策の社會的政治的經濟的基礎

四、濠洲の人口問題

五、現在の濠洲の統計的觀察

人口 — 産物 — 貿易

四七

四七

五五

六三

六七

七一

七三

七三

七九

八七

九七

以
上

第一篇 インドネシヤの民族事情

一 民族移動

インドネシヤの民族及び文化の研究が完全に遂行される為には、その前に更に一個の問題が解決されておかなければならない。それはこの広大な地域に於ける民族移動の問題である。云ふまでもなくインドネシヤとは地理學的に云へばアジア大陸の東南に散在してゐる無数の群島を指すのであつて、東経約九十五度から百三十三度に至り、南緯凡そ十一度から百三十三度に至り、南緯凡そ十一度から北緯二十度に及ぶ島嶼の總称である。面積合計七十一万二千四百九十四平方哩を占め普通マレー群島、臺灣及ニューギニアの南西にあるアル島、カイ島の間に散在してゐる全島嶼を包含し、半円形を描き、台湾とスマトラに於てアジア大陸に接し、その中心部はニューギニアに接直してゐる。これらの島嶼のうちス

マトラ、ボルネオ、セレベス、フィリッピンのミンダナオ、ルソンの如
き大島があり、其の向を小島が踏石の如く各島を連絡してゐるので島か
ら島へと簡單に渡航することが出来るのである。デュモン・ドウルヴィ
ユ *Dumont d'Urville* が始めてインドネシアは古代にアジアに接続し
てゐた一大陸の残存塊であると考へた如し、スマトラ、ジマヴァ、ボル
ネオの大島も恐らく第三紀末まではアジア大陸の一部であつたであらう。

サラシン (*Sarasin*) の地質學的研究によるとエオツエーン期にはセ
レベス島の如きは全く海底に沈んでゐたがミオツエーン期にはこれが高
くなりプリオツエーン期になると全く海上にぬきんで、他方馬來半島、
スマトラ、ジマヴァ、ボルネオ、更にニューギネア、オーストラリアとも
接続し、南洋諸島とアジア大陸とは陸続きであつた。

シエーテンガック (*Schotenack*) はこの地質學上の事實からプリオツエ
ーン期にマレー半島、スマトラ、ジマヴァ、セレベス、ニューギネア等
を経由してアジア大陸からオーストラリアまで陸路古代人類が移動した

と云ふ學説を發表した。

この學説に有力な證據を提供したのは直立猿人とゾロ人の發見である。ジマヴァのトリニル郊外のゾロ河床からオランダの軍医デュボア (J. Dubois) が一八九一年に人類の大臼齒と思はれるもの二個と頭蓋骨の上片を發見し、更に翌年同じ伯所から左側大腿骨と小白齒とを發見した。この頭蓋は甚だしき長頭低頭を示し眉部の隆起が著しく頭蓋容量少なくわづかに九。〇立方センチである。

骨格から判断するとこれは古代第四期洪積中中期に於て同地方に居住し現今絶滅してしまつたところの種族であつて、北京猿人等と同様に現人類の直系的祖先ではないのである。が然し人類の發祥に何らかの關係をもつてゐるものであることは否定出来ないであらう。

スマトラ、ジマヴァ及びボルネオも第三紀時代以前にはアジアに連續してゐたものらしいことは既に述べた如くであつたからである。

マレー、オーストラリア、ニューギランドには年代の推定し得ない遺物

があるが、西部マレーを除いては十九世紀末まで石器時代又は貝器時代
時代に屬してゐた。スマトラ、ジヤヴァ、モロレースター島、マルケ
サス、タヒチ、カロリシ等の諸島に及ぶ巨石建造物の遺跡が多数存在し
てゐるがその年代も作つた種族も不明である。

この点に關しマンチエスター大學教授ペアリイ E. T. Peery は其の著 *The
Megalithic Culture of Indonesia The Children of the Sun*
に於て文化繼續説

Culture Sequence を提出し、最初の食糧生産文化は次の文化要素によ
つて特徴づけられるとした。(一)灌漑の手段による農耕、(二)ピラミット、
ドルメン、石環岩窟、墳墓に典型的に見られる石材の使用、(三)石像彫刻、
(四)土器製作、(五)金屬細工と眞珠採集、(六)磨製石器の使用、(七)支配階級は
(a)血族結婚を行ふ神婚から生れ、天界と關係ある日の子達、(b)戦争の首
長として生存してゐる下界と關係する階級との二部に分たれる、(八)太陽
崇拜、(九)木乃伊化の實行、(十)大母性神、(十一)農耕及び母性神崇拜に關係し

た人身御供 (十二) 母權 (十三) トーテム氏族 (十四) 兩立組織 (十五) 外婚。而して彼
はこれらの文化要素の比較から「始祖文化」*Achaic Civilization* を想
定し、エジプト周辺から印度、インドネシマ、オセアニアを通過して中央
アメリカに及ぶ広大な地域に文化移動のあったことを論證してゐる。
勿論かゝる學說を全部的に承認することは危険であるが然しインドネ
シマの関する限りに於てはその言語、文化、體質の比較から印度、後方
印度、南部支那からの祖先的民族の渡来があつたことを推定しても誤り
ではない。

ペアリも食糧耕作の研究から太平洋の最初の植民は東印度群島即ちイ
ンドネシマの道をたどつて印度から来たものであると結論してゐる。イ
ンドネシマに於ける巨石記念物及び太陽崇拜の分布からインドネシマに
は数十世紀に亘る渡来民族の侵入があつて其の原初民族の活動が不明に
されてゐるが、尚後期の印度文化を淨化するに南部セレベス(ハブマ
カサール)、ジマヴァ、バリ等の諸地方に古代文化の痕跡を辿ることが出

来ると云つてゐるのである。

三、人種系統

インドネシマに於ける現住民の主要素は總て後母の移動に属するものの如く歴史に知られる限り大部分の地域は十六世紀以後に屬し、最も判明してゐるジマヴァでさへ六、七世紀を溯らないのである。

然し最初にインドネシマを通つて拡がった種族は捲状毛變種であつたらしい。

推測しうる限りの早期住民は（西部歐洲の旧石器時代中期頃）妙くともその西部に於てニ体型が存在してゐた。

この住民の大部分は中位身、暗褐色皮膚、波状又は直状毛の長頭広鼻型であつて、其の上に少数の身長の低い暗色穹状毛短頭広鼻型のネグロト要素が加入したものである。この南方アジアからの早期移動種族が何処まで分析してゐたかは不明であるが當時尚ほトールレス海峡が形成され

ておたのでニューギネアからオーストラリアに到達したであらう。

其の後アジア大陸の新石器時代民族大遷徙の余波がインドネシマに及び、アジア大陸の南東端から身長高さ暗色皮膚、波状又は巻状毛の長頭、廣鼻型の大群が殺到して来た。この種族はインドネシマから各島嶼を渡り、ニューギネアにまで進み同時に以前から居住してゐた古原住種族を吸収し、或は海岸から内地に閉息させてしまった。南方ではこの新渡来者は遠くオーストラリアにまで入り込み東側の居住適地を占領して古原住民を沙漠地方へ追ひやつてしまつた。

この種族は航海術、造船に巧みであつて更にフィジ、サモア、トンガ、クック、ソサイテイ、ポリモワ群島へ渡りマルゲサスに及び遂には絶海の孤島のイースター島にまで到達した。

又このネグリト海洋漂泊種族は北方して全インドネシマ、台湾から琉球、日本内地にまで達したらしい。

縄か時代を後にして更に異つた種族即ち身長低き暗色種に混血したので

であつて、これは現今スマトラ、ボルネオ、フィリッピンのルソン、モ
ルツカのアルフル族、インドネシヤの東南端及びニューギネア沿岸の
南西に其の痕跡を認めることが出来るのである。次に来たものは現住
ンドネシヤ人に屬するものであつて、身長低く、黄褐色皮膚、直狀黒色
毛、蒙古眼を持つた短頭広鼻型であつて、印度支那から来た先住民を圧
迫し、遠くメラネシヤに達した。

最後に東部アジアのトンキン、アンナム、支那沿岸から中位身長、黄
褐色皮膚、直狀異色毛、蒙古眼を持つた短頭広鼻型の所謂真正マレー族
が来た。彼等はフィリッピンの西岸に居住し又ボルネオ、スマトラに未
り所謂メナンカボーマレー原祖となつた。そして印度の影響をジヤヴァ
で受け、ニューギネア、ポリネシアに進み、更に東部メラネシヤからサ
モアに及び北行してミクロネシアにも広がつたのである。

是等の種族はハワイ、イースター、マルケサス島から更にアメリカに
まで渡来したのであつて、アメリカに其の土俗學的遺物が突見されてゐ

るか、然しアメリカの人種構成にはたいした影響を与へなかつたらしい。彼等は航海民であり腕木のあるカナトを持つてゐた。そして西部太平洋へ航海し、そこで既に住んでゐた暗色の広鼻型捲状毛のパプア族と接し、それに混血して我々がメラネシヤ人と呼ぶ種族を形成したのである。更にインドネシヤからの同じ民族群の移動はポリネシヤからインドネシヤへの地方的再帰運動であつた。

ポリネシアには二重要系統が存在してゐる。オ一型はオニ型よりも高い身長、華奢な体構、高い鼻、長い頭、狭い顔で直状毛であり顔面、身体に毛が多く濼色皮膚を持つてゐる。オ一型は中頭で歐洲人的相貌を持つてゐる。オニ型は軽度の短頭型で、モンゴロイド的相貌を持つてゐる。学者はオ一型を起源的に長頭型のネジオト系に、オニ型の短頭型をプロトマレー系に屬するものと看做してゐる。この二つの型も多分先住の黒色種族に取つて代つたインドネシヤの早期住民の代表者であらう。

このインドネシヤの移動種族層の交錯關係及びその残存者をアイクシ

エテット、*Hinkelstadt* は大別して次の四人種層に分けてゐる。

1. ヴエダ系層 *Melidide Schicht*

2. ネグリト系層 *Negritide Schicht*

3. メラネシマ系層 *Melanide Schicht*

4. 古モンゴリヤ系層 *Palaemongolide Schicht*

現住のこれらの典型的な代表種族はオーストラリア系層に属するものとして、マラッカ半島のセノイ、セレベスのトアラがあり、オニのネグリト系層に属するものとしては、マラッカ半島のセマン、フィリッピンのアエタがあり、オシのメラネシマ系層に属するものとしては、ニューギニアのポップア族があり、第四の古モンゴリヤ系層に属するものとしては、パラウン族がある。

このうち最古のものはメラネシマ系層であるらしく、古モンゴリヤ系層に属するプロトフレエが大陸から島嶼に渡来した時は印度のアーリマ文化興隆の以前だとされてゐる。所謂ドイテロマレトは印度文化を持つて渡来した。十二、三世紀以後には回教文化が輸入され、更に十六世紀

以後支那人の渡来は支那文化を傳播することゝなつた。

従つてインドネシヤの文化は次の如き成層をなしてゐる。

- 一 始祖文化（巨石文化）
- 二 印度文化（⁽¹⁾ヒンヅ文化、⁽²⁾佛教文化）
- 三 アラビヤ文化（回教文化）
- 四 支那文化（儒教・道教）
- 五 欧米文化（キリスト文化）

三 言語關係

インドネシヤの住民は言語學的見地から見ると二面に於てメラネシヤ、ポリネシヤ、オーストラリヤ語に關係し、他面に於て南東アジアのモンクメトル語系に關係してゐるところの広汎な單一群に屬してゐると云ふことが出来る。

従つてインドネシヤ語、ポリネシヤ語、メラネシヤ語は同一の系統に屬するものとして、フンボルト *Humboldt* はマレヨ、ポリネシヤ語の

名稱を與へたが、更にシユミット E. Schmidt は大洋洲に於ける言語關係の研究の結果オーストロネジマ語の名稱を與へ現在この用語が一般に使用されてゐる。而して彼は更に「モンク、メール民族」 Die Mori-Kamer-Völker の著作に於てアウストロネジマ語とアウストロアジア語との内面的聯繫性を明かにし、この広般な地域に行はれてゐる言語を一つの大きな語群アウストロジ語群の中に包含せしめたのである。

アウストロジ語

アウストロネジマ語
アウストロアジア語

かくしてアウストロアジア語系に屬するものは第一に古代マラツカ群としてセマン、セノイ（サカイ）を含み、次に中央群としてカーン、ニコバル、ウ、パロン、リマンを含み、次に南東及び北西群としてモンバクメール群（モン、クメール、バトナル、モイ、バーシン、ジマクン）、ムンダ群を含み、ムンダ群は更に東群（サンタリ、ムンダリ、

ブーメジ、ビルハール、コダ、ホー、ツリ、アスリ、クローラ)と西群(クルク、カーリア、シユアン、混交語たるサヴアラ、アングダバ)に分れ
カ四は南東混交語としてチナム、ラダイ、ジマライ、セダン、ラクライ
を含むのである。

アウストロネジマ語系に属するものとしては第一にインドネシマ語群
であつて西群と東群とに分れる。西群は更にマラガシ北群とマラガシ南
群とに分れ前者は臺灣、フィリッピン(タガル、ビサヤ、ビコール、イ
ロカン、イゴロット、イフグ、バガバ等)チヤモロ、パラオ、サンゼー
ル、北東セレベスを含み、後者は西亜群(マライ、アチン、バタック、
ニヤス、ムドラバリ、マツカサール、ブギ、メインタウイ、エンガー)と
東亞群(ジマヴァ、ズンダ、ホルネオのダマツク、セレベスのトラジマ
ビンバズンバ群)とに分れる。

東群は東フロレスのシツカ、テソン、ガロリ、ソロール、ロチ、西フ
ロレスのクポン、キサール、レタ、ワツベラ、ゴロン、アル、カイを含む

む、

カニにアウストロネジヤ語群に屬するものはオセアニア語群である。

之はメラネシヤ語群と過渡語群とポリネシヤ語群とに分れる。メラネシヤ語群は更に南群（ニューカレドニア、ロマリテイ、アネイツム、エロマンガ）、中部群（ニューヘブリデス、バンカ、フィジ、南部ソロモンの諸島）と北部群（北部ソロモン、ニューポメルン、ニューメリレンゲルグ、アドミラルテイの諸島）、孤立群（サンタクルス）、パプア混交語群（バリアイ、キレンゲ、ニトポメルンのオベルメンゲン、モノ、ウラヴァ、トラウ、ニューギネアの沿岸）、ミクロネシヤ語群（カロリン、マツア、ポナペ、ギルバート、マーシャル、ナウル）に細分される。

過渡語群は英領ニューギネアの南岸、中部ニューヘブリデス、中央ソロモン諸島を含む。ポリネシヤ語群は更に西群と東群とに分れ前者はフアイカーフォ、フツナ、サモア、トンガ、ウヴェア、ニエエ、後者はマオリ、マンガレヴァ、マルケサス、ラトンガ、ハワイに細分されるので

ある。

かく言語から見てもインドネシアはアジア大陸とオーストラリアとに密接な関係があり、大陸からの民族移動の経由地であった。インドネシアの最古住民の小部分に就ては大陸通路による移動を認め得るのであるが、然しその地質學上の状態よりして現住諸民族の總ての祖先が陸路移動したと考へる事は出来ない。

然らば多くの民族は如何にして渡来したものであらうか、夫は云ふ迄もなく海路をたどつたものである。マレー人は一般に過去に於ては卓越せる海洋民族であつた。オランマラユと云ふ種族名の如きは本来流浪種族の意味を持つてゐたのである。

インドネシアは人類學的に云へば主にアジアとオーストラリア、印度洋と太平洋との間に存在するアウストロアジア、アウストロネジマの諸島を包含し、而も此等の地方に於ける貿易風モンソン及び海流は早くより各地方への民族移動に對する可能性を与へてゐた。

インドネシアの諸民族は印度大陸、後方印度、マレー半島等に原御土を有し、その起源に於て、その混血に於て、その環境差異に於て維多の運命に遭遇した、ゆゑ、古代人種層と近代人種層とが重り、古住民族と新住民族とが交錯して統一的な記述を阻げてゐるので、其の人種分布及民族移動史の復現は現在のところ甚だ困難である

四 體質特徴

ドニケウ *Denis* はインドネシアの民族を四大群に區別してゐる。マレー族、インドネシア族、ネグリト族、パプア族がこれであつて、この四大群中前三者がインドネシアの大部分を占めネグリトはインドネシアに極めて尠なくアンダマン、フィリッピンに多少居住してゐるのみである。

アイクシユテッドに依るオウガダ系層のウエダとは現在印度のセイロン島東岸に住んでゐる古代住民層の残存種族と考へられるものであつ

て、最も原始的な民族の一つに数へられてゐる。グエダは平均一五七、六
厘の身長で大部分は長頭型である。腕及び下腿が比較的長く足は稍々扁
平で大距間隙が広い、額は狭く、広く短い顔で眼はひっこみ、蒙古襞は
少しもない、鼻は深くひっこんだ鼻根を有し、非常に低く幅広く、弓状
になつた鼻翼がある。唇はもりあからずに薄い。額は正頭型で額は突
出してゐない。皮膚色は暗褐色で扁平波状毛を有し体毛は少く肩と弓が發
達してゐる。この種族は體質的にも文化的にも最も原始的な状態を保持
してゐる。この系統に屬するものはセイロンのみでなく印度與地及び南
洋に広く分布にゐるのである。南洋に居住してゐる地方はニコバル、
マラツカ半島、スマトラ、ロンボク、スンバワであるが最も明白なものは
中央マラツカのセノイ族とセレベス島内部のトアラ族である。彼等は
今なほ新石器時代の生活様式を持ち殆んど全裸体で洞窟に居住し、農耕
を知らず狩獵と天然物を採集して食糧としてゐるのである、言語はモン
クメール語を使用してゐる。

第二の人種層はネグリトである。この種族の原郷土も印度と考へられ
てゐる。インドネシマに住む最も代表的なものは中央マラツカのセノイ
に最も近接して居住してゐるセマン族であり更にアンダマン群島に住む
アンダマン族、フィリッピンに住むアアタ族等である。これらは身長低
く、暗黒色皮膚で頭形は小形で短く広く中頭型であるがヴエダと最も異
なる特徴は密に縮れた羊状毛を持つてゐることである。

ヴエダとネグリトの發生及び相互關係は其のヴエダ系統とネグリト系
統の種族が又印度の外側部に見出されることによつても推測されるが更
にその言語に關して印度のムンダ族、ニコバル族（ネグリト系）、パロ
ン族、サルウイン盆地のワルリエン族、サカイ族（ヴエダ系）、マラツカ
半島のセマン及び印度支那のモンクメール族間に特別の親縁關係の存在
することを発見したシミットの論證に依つても明白である。

メラネシマ層はオーストラリア大陸の北方ニューギニアの犬島に起り
東方ニューカレドニア、フィジに及ぶ所謂メラネシマの居住種族を指す。

是等の種族は他の太平洋諸島のものよりも暗色皮膚を持つてゐるので「黒色人島嶼」を意味するメラネシマの語が與へられた。

言語學的にはメラネシマ住民はメラネシマ語を用ふるもの（ニューギニアの南東、北部沿岸及び全諸島）とパプア語を用ふるもの（ニューギニアの奥地沿岸地方、ビスマルク、ソロモン、ニューブリテス）との二群に分つことが出来る。同様に體質も二つに區別することが出来る。一は狭鼻メラネシマ型であつて、その代表者はパプア族であり、顔面長く鼻は鈎形でニューギニアに多くあらはれ、ニは広鼻、メラネシマ型で顔面広く鼻は凹状を呈しソロモン、アドミラルティ、ニューブリテス、サントクルス等に表はれてゐる。

メラネシマ人は現今メラネシマに限られて居住してゐるがズンダ諸島フロレス島には其の痕跡がある。近代の考古學上の進歩は印度のドラヴィダ族とニューギニアのパプア族との間の切斷された人種的鎖を石器時代に於ける遺物によつて連絡しようとする傾向を示すに至り、遙か旧

石器時代にメラネシヤ層がインドネシヤ全土を被つてゐたと推定されるに至つた。古代モンゴロイド層にはインドネシヤ地方の住民からジエダ、ネグリト、メラネシヤの三人種層を引去つた残りの種族を總称するのであつて従来の學者がインドネシヤ人、マレー人に區別したものを含んである。

従来の學者によればマレー人とインドネシヤ族とが區別されてゐるがマレー人とインドネシヤ人との間には本質的な差異があるだろうか。マレー人は一般に種々な要素、ビルマ人、印度人、支那人、パプア人等と混血して生じた雜種だと考へられてゐる。そしてその純粹なる形態がインドネシヤ人だとされてゐる。然しその形態學的研究に依ればマレー人とインドネシヤ人を區別し、その地域的分布を決定することは殆んど不可能である。かくしてアイワキ、サツドはこれらの變種を含めソッサムから西藏、マタガスカル、南支、台湾に及ぶ広大な地域に住む民族に

対して古代モンゴリア層の名稱を與へたのである。

古代モンゴリア層は各地方に於て其処の原住民と混血し種々の変種を形成してゐるが其の基本体制はヒルマのパラウンに最も明白に見られるのであつて、頭形は短頭型、黒色の状毛又は直状毛を有し、皮膚は帯黄明褐色であり、顔面は扁平で中鼻、張つた鼻翼を持つてゐる。そしてメラネシヤ層と混交してチモール、ハルマヘラ、フロレスの住民を生じ、ネグリト層と混交して大アンダマン住民を生じ、ヴェダ層と混交してニコバル族、スマトラのオーラング族を生じた。サラシンはインドネシヤ人とマレー人に対しプロトマレーとドイテロマレーとを區別したか。これは原始マレートに対する文化マレート又は其の住居地域から輿地マレートに対する海岸マレートの名稱の區別に過ぎぬ。

マレー族（所謂真正マレー）はマラツカ、スマトラのメナンカホ、マレー、ジャバ、ユース、スンダニーズ、他島の河畔マレーを指すは混血種であつてインドネシヤ人とガルマン、ネグリト、印度人、夏那人の

パプア人等との諸要素との混血から起つたものである。それでインドネシア人は純粹マレー体型であつて眞のプロトマレーと云はうであらう。インドネシヤ人と支那人との混血種はジヤヴァ、ボルネオの北部、北部フイリツピンにあり、ミンダナオ、パラワン島にはアラブ要素（モロ）が優勢であり、ジヤヴァ、スマトラ、バリ及びボルネオ南部の或部分には印度要素が存する。

ネグリト血液との雜種は群島北部に著しいが、パプア人影響は東南部諸島に強い。マライシヤのスマトラはマツカ海峡によつてマレー半島に對してゐるのであつて、恐らく原始時代には大陸と接続してゐたであらうと云はれてゐる。地理的にはアジアに面した叢林地帯も南部の高原地帯とに分れ、北部に居住するものはバツタ、南部に居住するものはクアと呼ばれてゐる。東岸、西岸接続地にはメナンカホー、マレーが住んでゐる。

ジヤヴァ島はスマトラ島と異リ平地がなく火山から成立してゐる。ジ

ヤヴァは古代印度人要素の影響を受けたのであつて、ジマヴァ國家を建設してゐた。

ニエセン (*Nysson*) に依ればジマヴァの人種構成は次の三要素に分つて出来る。

A マレラ人種、低い身長、広い顔、かなり高い鼻梁のある扁平四肢鼻、黄褐色皮膚頭髪は直状であつて南方モンゴロイド起源であるらしい。

B ケンジマ種、華奢な体構、長く細い四肢、長い顔、凸状鼻、多毛の皮膚、色は可变的であるが足部に行くに従つて暗色の度を増す、被状毛、ドラヴィダ、オーストラリヤ起源であるらしい。

C 第三の構成要素は小形の低い身長、短い四肢、急坂脊前頭を持った広い顔、広く深く凹んだ鼻、甚だしき捲状毛を持つてゐるのであつて、これは混血人種と考へられセアン又は南アフリカのブワンマン、ホツテントツトを想起せしめるものであつてアフリカ南部人に類似した要素をなしてゐる。

五 生産様式

インドネシアの諸民族に於ける生産様式を大別すると

(一) 熱帯的拾集経済 *Tropische Sammelnwirtschaft* と (二) 熱帯的漁業

・樺農経済 *Tropische Fischer-Handbau-Wirtschaft* と (三) 熱帯的耕

農経済 *Tropische Ackerbauwirtschaft* の三つに分つことが出来る。一般に

インドネシアはモンスーン地帯に属し高温多湿であり、乾期雨期及び季

節風、モンスーンの季節的変化がある。かかる風土的條件は一方に於て

その農業に、他方に於てその航海術に至大な影響を与へずにはおかなか

つた。食糧生産方法を主として下級より高級に及び種族を列擧すれば次

の如くである。

最も未開な種族にしてセイロン島の山住ヴェダ、フィリピンのアエタ

族をあげることが出来る。彼等は其の文化の段階が最も下級だとされて

おるのであつて、深山に居住し小さな遊群をなして森林を漂泊しておる

のである。そして狩獵を行ひながら野生の植物を喰ひ、毒矢を獵具武器

としてゐる。其の主食物は肉類で殊に好まれるものは骨髓の脂肪である。そして何でも食ひ得るものは食ふのであつて、植物の根、木の外皮、葉、野蜂の蜜の外お互の身体に附着してゐる虱を最も御馳走としてゐる。この下級狩獵民はその食糧源泉を全然自然に依存してゐるので飢餓が常につきまといふ。空腹の時腹を締める飢餓帯が廣く使用され、又食糧豊富に際には食濁めして飢餓の時に数週間も絶食し得る能力を發達させてゐる。モルツケン、スング諸島、スマトラ、ジャバ、ボルネオ、セレベス等の源住民は漁業の外非常な單純な耕農を行つてゐる。土地はたゞ棒を以て耕され、犁も家畜も用ひられず焼畑をし肥料も使用されない。プロトマレーもこの原始的な生活様式であつて簡單な耨農を營む狩獵民族であり、首狩を行ふ風習を持つてゐた。首狩をする主なる種族はボルネオのタイマク、ニマス、セレベスのアルフル、トラージマ等である。彼等の多くは米を耕作してゐる。米は多く陸稻であるが、セレベスのミナハサ地方の種族、トラジマ、スマトラのバタク族は水稻を栽培し、

フィリッピンのボントク、イゴロト、イフガオの諸族は所謂雜段型水田を耕作してゐる。

インドネシマの一部及びオセアニアには里芋に類する植物タロの根から粥を作つて食ふ。パンの木が三本あれば一人の人間を一生生涯養ふことが出来る」と云はれてゐる。小兒頭大の巨大の実の一部はその俵焼き、一部は餅のやうにつぶして喰ふ、其他バナナ、椰子の実、ヤム芋がその主なる食糧である。

これらの未開民族を除く他のインドネシヤ人、マレー人は一般に稻の水田耕作に従事し、且つ農具は専ら鋤を使用してゐる。耕作の主なるものは米であるが雨期乾期の交替に適應して王蜀黍、芋類も作る。彼等には多く檳榔子の実を石灰に混じて嚙む習慣が行はれてゐる。又カイユと名称けられた腰巻、サロンと称する印度から輸入された覆布を体にまぎつけてゐる。

女子はジマヴエトと云ふ帯を用ひ、家屋は堀立小屋で、クリスと云ふ

精巧な象眼を有する短刀及び楯弓を使用してゐるのが特徴である。

インドネシヤの文化は一般的に云ふと印度、支那、イスラム最後に歐洲の文化によつて甚だしき影響を受けた。

歐洲文化の支配は單に文化に止まらずして經濟及び政治の支配形態にまで發展した。彼等の民族的自覺を麻醉と暴力によつて抑制し、彼等の物質生活のみならず精神生活まで欧米屬領化してしまつてゐるのである。貨幣經濟及び欧米の勢力浸潤が如何に彼等の固有の生活を變化させたかは稿を新にして述べたいと思ふ。

今や我々は千島列島からシンガポール、スマトラに至るまでの大分裂を隔く生活形態即ち東亞共榮圈の確立に努力してゐる。それには散在せる海洋遊牧民たるマレヨ、モンゴールの結束を強化しなければならぬ。そしてそれを完成するためには指導勢力としての日本は大西洋の諸勢力と當然対立しなくてはならないのである。日本の國家及び種族の拡大移動なくして八紘一宇海洋空間の統一の實現は不可能である。鎖國に

よつて切斷されてゐた日本民族の海洋憧憬力の復活と生命力の再燃焼は
必ずやこの困難な事業を成就するであらう。

第二篇 濠洲の民族事情

一 人類學より見たる濠洲原住民

(一) 原始民族としての濠洲土人

オーストラリア居住の民族はその原住民たる所謂オーストラリア土人と新移住民たるアングロサクソン系白色人種及びアジア系黄色人種との三種に分つことが出来るのであるがアジア系民族も原住民も其の人口数が甚だ尠く而も何らの社會的、經濟的、政治力も持たないので特に民族政策の対象となるだけの價値も有しておらない、實に濠洲全人口の七〇%を占めるものは純粹のイギリス系統に屬する濠洲人に外ならないからである。

然しながら人類學上より見るならば濠洲土人は現存する最も未開な種族として特殊な意義を持つてゐる。

従つて本篇に於ては先づ原住民たるオーストラリヤ人の民族誌を記述し次に有色人種排斥政策実行の経過を述べ最後にアングロサクソン系白人の人口現象を概観することによつて濠洲の民族事情を明かにしたいと考へる。

現在濠洲大陸に居住してゐる所謂オーストラリヤ人は其の周辺の太平洋諸民族と直接に人種的親縁關係を持たず、全く孤立した地位を占めてゐるばかりではなく、それは人類の文化發展の段階に於ける最も下級の民族に属し、且つ人類の發生と直接關係を持つ點に於て人類學上重要な課題を提供してゐる。

元來オーストラリヤは廣大な面積に極少數の住民を持つてゐるに過ぎないが、更にその原住民の人口数は驚くべき程少ない。一九三五年六月三〇日に施行された國勢調査によれば純粹の原住民は五四三七八人であつて、そのうちクイーンズランドに住むもの一ニ〇七〇人、ノーステリトリに住むもの一七四二三人、ヴィクトリヤ洲に住むもの四八八人、ニュ

ーサウスウエールズ州に住むもの九。九人に過ぎないのである。

此の稀薄な人口密度の地域環境は他のオセアニア地域と明確な対照をなしてゐるのであつて全大陸の西方三分の二は砂漠又は亜砂漠であつて北部東部沿岸の狹帯及びタスマニアのみが適度の降雨を持つてゐる。クイーンズランドの北部半島はトレリス海峡によつて殆んどニューギニアに接屬してゐるので両地の交通には格別の航海術を必要としない。而もオーストラリアは始めて民族が渡来した時には未だニューギニアに連結してゐたのである。

一般にオーストラリアは廣大な袋地をなしてゐるのであつて只に北部の狹路からのみ入り得るがそこから出口はないのである。

濠洲はプリオリオン期にはニューギニア、ホルネオ、ジマヴァ、スマトラ、マレー半島と接續し、濠洲、南洋諸島とはアジア大陸と一帯の陸續であつたがデイルビウム期に是等の諸島は分離したと示はれてゐる。シエーテンザックは原始人類はアジアとオーストラリアとが連結してゐ

た時期に濠洲に入り、其後濠洲がアジア大陸と切断された、とめ特殊の發達をなしたものであると主張してゐるがクラークは逆に濠洲からアジア大陸に入ったとしてゐる。

而してこの證據となるものは和蘭の軍醫オイゲン、デニボアが一八九四年ジマヴァのトリニール、ベンガワン河岸から發見した所謂直立猿人 *Pithecanthropus erectus* の一臼の頭蓋骨と、三臼の臼齒と一臼の大腿骨であつた。

元來人間が他の動物より優れてゐる点はその智力であつて体力に於ては到底猛獸に及ばない、然るに人間が一定の智力を發達させる間は少なくとも猛獸の居なかつた土地に居住しなければ人間は智力を涵養する以前に猛獸によつて織滅されたであらう。

この点から見れば濠洲は何等の猛獸も住まば草食動物だけであるから以上の條件を有してゐるのであつてシエーテンガックは原始人類の郷土を民俗學的、體質學的論證を擧げてオーストラリヤに求めてゐるのであ

百ノ...

(三) 言語分類

言語學的にオーストラリア、タスマニアの住民はニ大群に分つことが出来る。一は大陸の北部境地に居住してゐるものであり一は残分の全地域に居住してゐるものである。北部群はニューギニアのバプア語と關係があるらしい。タスマニア語は全く孤立語であるか又は遠き南東オーストラリアの言語と關係があるかは未だ明白にされてない。

然し最近のパー・ウェー・シユミツトの研究によればオーストラリア人の言語と後方印度、インドネシアとの言語との間には密接な關係があることが明かにされた。言語學的に種族を分類すれば次の如くである。

南部濠洲語

Victoria 語

1 Buamlike Kolijon Hulim Kurniai

2 Yum - Kerei 語

Yum Kure

3 南部語

Nasingeri

↳ Nuzay 河上流地方の親交語

Bangerang, Dandurua 語

↳ 東部語

Murawai, Tangatli - yubumbil - Pibumbil, Masinging, Tuambal,

Wakka - Rali, Bidi, Kuumumbura, Kalifan - Bay, Buridyl

Kofa - yimidi

↳ 西部語

Banger 語

中部語

Kuridya

7 中部群

— 中南部群

Pasmakalla, Meayu, Mulla

Biasi, Kana, Barling

Kungari - Bivara

中北部群

西部群

Kopi, Basku, Gora

東部群

Mambura, Wabelaura, Bundeheim

8 Widadiyari - Kamilaroi 群

南部群

Widadiyari, Worgaitora, Wailuram 等

II 北部濠洲語

— 子韻群

西部群

.. Catherine 河群, Daly 河語
Wodluwonga 群, Karalaiga, Colung 半島群, Kaaranda, Walati 河語

2 濁韻群

Wolaha, *Caledonia* 漢語, *Pope* 河語, *Ahemkul*, *Princess Charlotte* 灣語

3 母韻群

Skanda, *Yelina*, *Malakera*, *Chingali*, *Xemura*, *Mingim*, *Yorle* 岬語

(トールレス海峡の西部諸島も含まず)

(三) 體質特徴

オーストラリアの原住民は大陸の北部東部(最も生活に適せる地域)を占めてゐるものと西部南部(砂漠と乾燥地)を占めてゐるものとの二群に分れてゐる

兩群とも長頭型要素が大多数であつて短頭型要素は二一七パーセントに過ぎない。然し前者は高頭型であるが後者は扁頭型である。

タスマニアの原住民は十九世紀後半に死滅してしまつて現今はその混血種が残存してゐるのみである。

身長は北部群が(平均一七一釐)南部群、タスマニア(平均一六五)

一六七種)よりも高く皮膚色は到る処暗色であつて濃チヨコレト色一般の色調である。一から北部、タスマニアの更に暗色なものにまで変化してゐる。

毛髪は大陸の大部分が波状又は直状であるが北部には往々捲状湾状のものがありタスマニアには彎状毛が最大である。或學者は大陸の南部タスマニアが吾界で最もよく人種の最早期体型を保存した土地であると信じてゐる。

オーストラリア大陸に居住してゐるオーストラリア人は太平洋諸島の民族と其の體質、文化を異にし全く孤立した位置にあるように思はれる。オーストラリア人は歐洲人の植民に其の居住地が蚕食され人口は減少して来たのである。そして人種的頽廢を示してゐる。現今その純粹なるものは主として同島中部又北部海岸の部族であつてスターリング

Stirling スペンサー *B. Spenser* キレン・ロート *Gillen W. Roth* が

其の研究報告を公にしてゐる。

一八五一年の調査によるとオーストラリアの原住民は五五〇〇〇人であつた。一八八一年には三一七〇〇人に一八九一年には新發見の地方及び雜種民を加算しても僅かに五七四六四人に過ぎない程減少したのである。一八三六年と一八八一年間のヴィクトリアの原住民は約五〇〇〇から七七〇まで減じたのである。

尚ほ南方オーストラリアのナリンエリ (Narinyeri) 部族は一八四二年には三三〇〇人であつたが一八七五年には五一一人から構成されるやうになつてしまつたのである。

原住民人口調査 (一九二六年五月三〇日現在)

洲	成人		小児		合計	成人		小児		合計
	男	女	男	女		男	女	男	女	
ニエーサウスウェールズ	四五〇	二八八	一四二	一五一	一〇三一	一六九二	一三六九	一五三二	一五四三	六、三五
ヴァイクトリヤ	二八	一八	九	一	五五	一四二	一三八	一〇二	八八	四九五
クイーンズランド	六二九九	四三〇	一五七三	一四三三	一、三六〇	一、六九五	一、〇一一	一、〇一七	九二四	四、四七
南部オーストラリヤ	二九八	一八〇	二四六	二四七	三、五三一	四六五	三六〇	三〇九	三、一八	一、四五二
西部オーストラリヤ	五八二	四八五	八四六	七〇八	二、三三二	七七九	六四九	五六二	四三〇	三、四二〇
北部領	八四五七	六五一三	二、六八四	二、二〇三	一、九八五	一七七	一九三	一四七	一七二	六八九
一九二六年總計	二、七二五	一、六八一	五、四九九	四、七四〇	五、九二九	四、三五〇	三、六一〇	三、六六七	三、四七五	一五、一〇二
一九二五年總計	二、三三五	一、八四二	五、七五〇	四、八三八	六、三三九	三、九九六	三、三六六	三、〇八四	三、〇四七	一三、三九三
一九二四年總計	二、三三四	一、八四四	五、七八七	四、九五〇	六、三四一	四、〇三二	三、三三八	三、五三六	二、四六四	一三、三〇二

州	遊牧民	正規の職業を有するもの	保護小屋に住むもの	不詳	合計
ニューサウスウェールズ			三三三二	四六八四	七、〇六六
ヴィクトリア			二九三	二二一	五一四
クイーンズランド	四三八四	三八四四	七三二〇	三、一〇三	一七、六五一
南部オーストラリア	三、四六〇	三、四〇〇	六九三		三、九八三
西部オーストラリア	一、六四八五	五、〇六九	三、〇八八		三、九四二
北部領				二、〇、五四二	二、〇、五四二
總計	二、三、三、三九	九、七、四三	一、三、七、七六	二、七、五五〇	七、四、三九八

四〇〇

體質的に見るならばオーストラリア人は人類の最古の系統の分派に屬し
クラーケに從へば或體質特徴はネアンデルタールよりも退化してゐるが
歐洲人的相貌を具へてゐるものが多い。

クラーケ *Chastak* の計算によれば西部オーストラリア人の純粋な土
民は二〇〇〇〇である。オーストラリア人は「オーストラリア人種」と總
括される特種な体型を示してゐるのであつて皮膚の色は暗褐チヨコレ
ト色身長は中以上（一米六七）で頭髪は弯状又は波状、頭形は伸長頭
型（頭形指数は七一、二 生体は七四五であつて眼窠は突出し
弓状をなし鼻は扁平、往々凸状、鼻根は薄く沈み、鼻孔は大きい（生体
平均鼻形指数九四）唇は前に突出して頭蓋容量は少く（一三四九立方
糎）体毛組織は充分發達してゐる。或る特質（長頭型、鈞状鼻）は此の
大陸の外北東の海中に突出してゐる島嶼のオーストラリア人、メラネシ
ア人中にも認められ而もオーストラリア人の此の體質はセイロンのヴェ
ダ及び印度のドラヴィダ人の或民族と近似してゐるのである。更にオ

ストラリヤ人は北、東に住むものと西、南に住むものとの二部に分れてゐる。両者共広鼻、長頭型であるが前者は高頭型、後者は扁頭型を示してゐる。身長は北方部族は高く（平均一七一糎）南方部族、タスマニヤ人は低（平均一六五—一六七糎）いのである。

現今絶滅したタスマニヤ人の体質は寧ろオーストラリヤ人よりもメラネシマに近似してゐるらしいが其の言語は現今のオーストラリヤにもメラネシマにも存在してゐないところの漆着語 *Agglutinative* を使用してゐた。一七七七年にクックが探検した時には一万から二万の人口があつた。体質は身長中以下で（一米六六）頭蓋骨は並長頭型（頭形指数七六一七七）で顔面は大きく斜頭型、鼻は扁平で大きく、毛髪は彎状毛頭容量は男性一三。〇立方糎女性一一。〇立方糎である。ダックウオース *Duckworth* によればタスマニヤ原住民は頭形指数七三九、垂直指数六四四、齒槽指数一。三五、鼻形指数七八四、上顎齒槽指数六四九、ブロカ上顔面指数一。二五五、ゴールマン上顔面指数七。〇二であつた。

(四) 文化様式

タスマニア島は現在白人のみが居住し、原住民は一八七六年に絶滅してしまつた。此の島は濠洲と同様に一八〇三年六月十三日に英國の最初の犯罪者植民地となつたのであつて一八〇四年のタスマニア人口は八〇〇〇と推計されてゐた。

人類學的にはタスマニアはバプアと關係が深いと考へられてゐたが事實に於てその文化、慣習はオーストラリアに近いのである。

衣服は男女ともに無く毛皮類が裝飾及び子供を負ふ爲めに用ひられるに過ぎなかつた。これに反して皮の草履を使用し、身体に色彩を施した。家屋は板又は草から作つた雨覆のみからなり又木の洞を寢所としてゐた。經濟形態は拾集又は漁獲であつてその食糧源泉は主に魚と貝類であつた。武器は木製の槍、石斧、半米の長さの投棒、石刀があつてオーストラリア土人の用ひるブメーラン、投射柄付槍、弓矢はこゝにはない。死体は高い樹上に葬つた。

濠洲に於てはその植物地帯、動物地帯に於ける、食用動植物が貧弱なためと外來文化の輸入がなく隔離されてゐたため殆んど文化の進歩を示してをらない

天然資源の貧困は大人口を扶養することが出来ないため彼等の生活は小人数の遊群をなして漂泊し、狩獵には果実、木の根を拾つて食用に供してゐるのであるが家畜を知らない、

家屋はタスマニア人と同様なものであつて草又は木枝から作つた半球状の低い小舎か洞窟を使用する。

衣服はなく僅に腰部を被ふ、主に裝飾の意味を持つた獸皮又は人間の毛髪の帯を使用し、胸部、上腕に文身をしてゐる。技術的には略旧石器時代に該当し、金属を缺いてゐる。

武器としては弓矢の外ブメーラン *Bumerang* と投鎗柄がある。

ブメーランと云ふ言葉はオーストラリア語の *Wimmera* 即ち投板から

転化したものであつて、柄の一端を曲げた板からなり風の吹く方に

向つて擲ると枝は曲線を描いて進み、若し目的物に当らなければ再びもとのところに帰つて来る武器である（坪井博士はこの道具から思ひつかれて「飛んでこい」と云ふ玩具を作られたことがある）。

投槍柄は飛道具として槍を遠方に投げるための特種な装置であつて棒の一端が嘴状をなし、その尖端に投槍の柄の一端をはめ込んで槍を飛ばすのである。



特種の交通機関はなく、妙かに丸木舟があるのみであり又土器の製作を知らない。

宗教は魔術崇拜であつてあらゆる自然物が靈魂を有してゐると考へ、コロポリ踊が行はれる。

社会制度はトミズムであつて動物又は植物を祖先と信じそのトミテムに屬する氏族員は神聖を義務としてその動物を食つたり、殺すこと

はタブー（禁忌）である。又同じトテム氏族員は結婚することが出来
ない所謂^{エフゾカミ}族外結婚が行はれてゐる。

二 濠洲發展史

(一) 因人國としての濠洲

濠洲は英國が實權を握る前に既に和蘭、西班牙等の航海者により部分的に発見されておた。だが之等の地方は殆んど濠洲西部の不毛の台地が探險されたのであつて、探險家達は唯、探險と云ふ経験をオーストラリアの発見史上に書き加へると云ふだけに止り、永続的に植民建設の契機たる役割を演ずる事が出来なかつた。

英國は一七六八年から一七七一年の年代に於て艦長クックにより第一次航海が行はれ、先づタヒチに於て金星の太陽面通過を観測したる後、南西方面に船を向け、ニュージーランドに至り、此所を足場として濠洲の東岸に達したのである。此の濠洲東岸は従来、和蘭人の手によつて探險された地域と異り、肥沃なる土壤を打掘けて居り、港湾又良港にして、英國探險隊の一行はボタニー湾、ジャクソン港、シドニー、ヨーク岬

等に達しトリス海峡を經由して本國に歸還した。此の第一回探險の結果、豪洲の東岸全地域をニューサウスウェルスと命名し、英國領たる事を宣言したが、當時の列國にとつては、豪洲が大なる價值を有する大陸であり、積極的に進出すべき土地であるとは考へられてゐなかつた。豪洲が英國の植民地として本國の關心の対象となつたのは一七八八年、アメリカ独立戦争が終つて、アメリカの王党員のため、また植民地労働者として今迄アメリカに送つてゐた囚徒のために初めて積極的關心を保持した時であつた。即ちアメリカの独立が英國をして豪洲に關心を保持せしめたと言ふ事が出来る。後、王党員はカナダに移つた為、亦亦、豪洲は英國人の流刑地として登場し、之等囚徒労働力をして農業開拓者たるの使命を負はせたのである。斯くて豪洲は(一)流刑地として、(二)植民地としての二重の使命を本國の為に遂行する土地となつた訣である。

最初の囚人船は一七八七年五月十三日英國から豪洲に向けて船出し、アーサー・フィリップが艦長となり、又豪洲に於る英國政府代表者たるの

地位を與へられた。斯が当時の英國政府には豫洲が此程の廣かりを持つ土地であるかも知られなかつた。唯、フィリッポはヨーク岬から豫洲の南端に至る所謂ニューサウスウエルズへ当時、豫洲と云ふのは無く和蘭の探險隊が此の地を新和蘭と呼んだ如くに、英國人によつてはニューサウスウエルズと呼ばれてゐた。この地域の支配權を與へられた訳である。

此の囚人船がボタニリ湾に到着する迄には約八箇月の日數を経ねばならなかつた。罪人達は新しい大陸に移された後も本國に於ると同様に監禁された。刑期が満了しても遠方の本國に歸る事も出来ず、與へられた一定の扶持を資本として、豫洲に踏止り、其後の独立生活の設計に取りかかる暇はなかつた。年々、新しい囚人達が異國の獄窓に次々と送られて来た。当時の英國は新しい植民地の開發の爲に囚人達を送つたのであつて、唯に刑事政策上の手段たるに止まらず、植民政策上の手段として、此の思ひ付きは着々具体化されて行つたのである。刑期を終へたも

のは豫州の地に止まらせ。若干の資本を喚へる。本國の刑法を嚴にし
て、私書を偽造したもの、馬を盗んだ者等、ですら終身刑に處し豫州に
送り込んだと云ふ事である。刑事政策と植民政策とを巧みに結びつけた
最も典型的な一例を此所に見る事が出来よう。

印度に於ける英國の植民政策は出来るだけ、本國人を植民地に移さず
に、土着人政策をうまく使ひ分け、統一勢力の發生を防圧する分離支配
主義を遂行した。自ら家族を引き連れ本國を離れ、新しい植民地社会を
建設する目的を以て獲つたのはアメリカであつたが、此の植民地の動機は
宗教的なものに根ざされ居た。此のアメリカ植民が、独立戦争に連結
し、「植民地は尚ほ果實の如し、熟すれば即ち木より落つ」とトキユルゴ
トをして云はしめた後に登場した豫州植民地の性格は、アメリカ社会建
設の起動力となつた宗教的熱情等は何等具備されず、本國を止むなく追
はれ、人生最後の生き場として行き着いた墓場であつた。彼等が刑期を
終へて、明るい地上に輝く太陽を見た時には既に情熱も、徳行も、輝き

渉る人間性も磨滅したった人間が出来る上つてゐた。植民地社会は之等の白人の自発心にまつのでなく、上からの強制により開拓労働力として切り用かされて行つた訳である。

斯くの如く英國の濠洲植民の動機は刑事政策と植民政策の包括的遂行にあつた。囚人達は官憲の命令により一定の労働に服し、アイルランド産の羊及牛の輸入により、主として牧畜業の開発に従事する事となつたが、植民地の脊後にはブリエー山脈の障壁があつた為に牧場地の狭隘を感ぜねばならなかつた。一八〇九年、ラクラン・マツカリー (Lachlan Macquarie) が、ニュー・サウス・ウエルズの知事として赴任するや、彼は道路政策を遂行せねばならぬ事を感じ、奥地に向つて数多くの道路を敷設したので、ブリエー山脈の障壁は人口を押し止むる事は出来なくなつた。其の結果、マツカリー河上流に理想的な牧場を発見し、今迄の狹隘な土地は此所に新しい曙光を浴びる事となつた。此れから濠洲の開拓はとつと打擡げられ、一八一八年前に既に五〇萬エーカーの牧場面積を算す

るに至つたのである。ラクランマツカリーは在職十余年に偉大な仕事を爲した事になる。牧場から取れた羊毛は英國に次々に送られる事となつたが、一八二〇年には一萬ポンドであつたものが、僅かに十年後の一八三〇年には三百五十萬ポンド、一八四〇年には七百萬ポンドを輸出するに至つた。囚人は斯くて経済の分野では誠に偉大な貢献を英國経済に與へた事になる。

所で新開拓地が着大な労働機會と利潤とを産み出す地域となつた為囚人労働力のみを以つてしては生産を続行し得なくなつた。英國が在来囚人のみを以つてする濠洲開拓を続行する限りに於ては早晩暗礁に乗り上げざるを得ないことになつた。此所に始めて自由移民の渡航が奨励されるに至つたのであつて、此の点で一八三〇年頃から濠洲移民の新類型が現はれる事となつたのである。

更に流刑民が開拓労働力となつた為、植民地社會の風俗は悉く、道徳は悉くの極に墮し、早晩之も考慮を要する問題として本國並みに出先

當局の頭を悩ましてゐた。就中、宗教家の側からの猛烈な反対論議は行なはれた。一般に豫州に囚人を送る事に対する非難の聲が押へ切れる程の力となつた。一八三八年、英國下院は流刑制度を否認するに至り、一先づニューサウスウエールズにのみ此の制度を中止する事となつた。だが全般的に囚人労働力の豫州送附を中止する事は、さなきだに労働力の不足に陥んでゐた豫州にとつては痛手となるので、他方に於て自由植民者吸引政策を執り乍ら、漸時廃止すると云ふ方策に出でねばならなかつた。斯くて一八五三年に至り、永年の囚人流刑制度は全豫州に涉り廃止される事となつた。

此の自由移民吸引策は羊毛工業の発展を中心として初を修めたのであつて、單純に囚人流刑政策に対する倫理的非難から轉じて自由移民に転換されたと考へらるゝはならぬ。一々の政策から他の政策に初采的に転換するには又其れ相応の利害關係の紐帶を設定せねばならなかつた。二つの政策の転換の軸こそ實に羊毛工業の発展の中求めらるゝ。本國

の一般人にとってボタニイ灣とは惨たらしい囚人達が追放されて長い海を渡り、行き付いた人生最後の港であつた。人々は此の港が暗い霞に被はれ、岸辺の水音は重く、どす黒い錨の軋りを聯想した。一七九〇年代の英國人と一八三〇年代の英國人とは全く豫州觀に一八〇度の転換が起つてゐた。ボタニイ灣は羊毛原料の積出港であり、毛織物工業を中心とした英國の産業発展に不可欠なる商品資本材の供給地となつた。暗いバラマツタの獄窓や、人口増加の見地から結婚することによつて女囚は放免される刑事政策は首語りとならねばならなかつた。新しい豫州は斯うして登場するに至つた。何故に悪い人間のみに此の羊毛の出る来る利潤の泉の辺に送らねばならぬか、と云ふ疑惑は實際的性格の英國人の念頭に浮んで来る想念である。善良な失業英國人ハ過剰人口は今こそ行くべきではなからうか。之が當時英國にある失業人口が執つた新しい態度と云入る。ウエイクフィールドの植民に関する主張が産れるや一層此の勢ひは高まつて行つた。自田移民は増加するに到り、斯くて流刑民制

度を中止する事を可能ならしめたのである。

(二) 自由移民者の流入と開拓

以上の如く自由移民流入の途は開かれた訳であるが、總之の自由移民が自己の費用で渡航したのではなかつた。其の半、比較的暮し向きの良い者のみが此の程な長途の旅をして開拓地に出赴く事が可能であつたに過ぎない。其所で自己の費用を待たずして、而も濠洲渡航を希望する者達に、其の望をかなへさせてやる為にはどうすれば良いであらうかと云ふ小策が立てられねばならなかつた。ウエークフィールドの政政要綱とでも名付くべき植民策は此の時に登場した訳である。

一八〇〇年から一八三〇年頃迄は、政府の許可を受けずして任意に新しい廣大なる土地を手に入れた事が出来た。其所でウエークフィールドは此の土地問題に着眼して吸引策を考へたのであつて、アメリカ合衆國が西部開拓を遂行する時にやはり人口を吸引すべき土地政策を立て

たのと思ひ合せて興味深いものがある。彼に由れば、

(一) 英國の生活風を植民地に移すこと。

(二) 新なる渡航者は一定の土地に居住して日常の業務に服し、英國法を遵守すること。

(三) 土地の分配は一様であつて、土地価格は均等たるべし。

(四) 土地買却の利益は移民輸送費及び植民の創業費に充てるべきこと。

等、其所には色々の矛盾も指摘されようが、実行し易い方策であつた爲に、直ちに採用される所となり、弊害の多い自由賣却は阻止され、土地価格は騰貴した。此の爲、自己の費用の財源を設定する事が出来、一八三〇年代に七百人に満たなかつた自由移民者は十年後の一八四〇年には一萬二千人を数へるに至つた。

ウエイクフィールドの植民説は西オーストラリアでは余り支持せられなかつたが、南部オーストラリアでは著大な成功と効果を修めた。當時の南オーストラリアでは一時投機熱が擧り、儲ける者も居る代りに負債で首の

廻らぬ者も続出し、経済上の恐慌状態を呈するに至つたので、本国政府は資金を供出して一時其の急を救つた。時たまたま、アデレード市外の土地が小麦の耕作に好適な條件を具備してゐる事が知らるゝに至り、夏作が農業の発展に寄與する所、誠に大なるものがあった。更に一八四〇年にはカポンガ (Kaponga) で銅鉱が発見されるに到り、四五年にはバレーバレーの銅鉄の発見となり、此の頃から南オーストラリア一帯は銅山業の発展を約さるゝ事となる。

所で銅鉄の発見よりも更に一層汚況を呈せしめたものは金鉱の発見であり、就中、一八五一年メルボルン附近にバララット金鉱が産額著大であつた。革から、人口はゴールドラッシュに熱を抱き、熱病患者の如く金から金へと赴いた。政府は個人の金採掘を認めなかつたが、民衆を阻止する事が出来ず、唯、高率の採掘税を賦課する事によつてのみ、民衆の蜂集を喰ひ止め得たのである。斯くして、ウイクトリア及メルボルンは繁栄を加へ、金都の觀を呈したと云ふ。人口もどつと此の州に飛来込ん

だ。第一表は概略の人口状態を示すものである。全体として一八五一年を基準とすれば十年後の一八六一年には約三倍の人口、二百五万人に増加してゐる。此の中、ウクトリアのみは十年後に約七倍に達し、五一年に七万七千の人口が六一年には約五十四万人に膨張してゐる訳である。金をめがけて如何に人々が殺到したか、窺はれる。

第一表 オーストラリアに於ける人口増加

	總計	ニューサウスウェールズ	クィーンズランド	オーストラリア
1851	702,253	187,243	77,345	437,665
1854	1,183,030	251,315	236,792	694,917
1857	1,686,540	305,487	410,766	970,287
1861	2,059,331	350,860	540,322	1,168,149
	係		数	
1851	100	100	100.00	100
1854	168.46	134.22	306.16	158.78
1857	242.16	163.15	531.08	221.70
1861	293.25	187.38	712.59	266.90

此の金鉱発見を終端として、内部大陸の発見への気持が人々の胸に抱かれた。濠洲の開拓は斯うした探險隊の努力によつて徐々に進められ、行つた訳である。最も劇的なのはジョン・マツクドゥル・スチューアート (John MacDonall Stuart) に依つて為された、アデレード、ポートダーウィン踏破である。之は一八六〇年、六一年、六二年と連続的に行はれ、遂に一八六二年七月二十四日、印度洋を眼前に見る事が出来た。斯くてオーストラリアに被つてゐた、ウエールは一枚一枚剥ぎ取られて行つた。先に述べたヴィクトリアは金鉱の爲富裕な州になつてゐた。其所で州民達はオーストラリア開拓にこそ、此の富は利用されねばならぬと、次から次に、探險隊が此の州から繰り出され、行つた。一八六〇年から七五年迄の間に殆んど大部分の地域が踏破され、一九〇〇年には全地域が白日の下に出現された事となる。オーストラリア開拓地図は此の年代的に開拓地を白色で表はし、黒色を未踏査地域とする場合、ウエールがほぎとられ、行つた過程を示すものである。

オーストラリア開拓地



備、このやうにして豫州は次第に開發されて行つたのであるが、土地が開發されるにつれて産業全体の向題が起つて来る。羊毛とか牛肉、小麦、バター等の生産者としてか、或は其等の原料を使用して織物、家具、機械等の生産者としてか、免に角、ゴールドラツシユ以後のオーストラリアには深刻な向題が起つて来た訳である。一八四七年の法律によれば、開拓者は十四年間は自由に大土地所有を行ふ事が可能とされた。之等の土地は總て肥沃であつた。所で人口が農業か或は製造業に集中して来る場合には土地が必要とされ、この向題を解決するために此所にロバートソン法の制定を見る事となつた。同法によれば、農業に従事せんとする者は地図上に私有地として記入されてゐない所なら何處でも四〇エーカーから三三〇エーカーの土地を獲得する事を得るものとした。土地価格は一エーカーにつき一ポンドと制定され、購入価格の四分の一が直ちに支払はれねばならなかつた。斯くの如くして小農が増加したが、其の所期の効果と思ふ様に生ぜず、また土地を投機の対象とする傾向が産

れて来た為に、大土地課税が施行され、土地細分により小農を増加させ
た。世界大戦中に穀物価格が騰貴した事によつて土地需要が起り、従つ
て其の価格が上昇し、土地買却者の数が一時増加した。所で其の土地が
結局、農産物の爲に使用されるか或は羊毛の爲に使用されるかは一にか
かつて其等生産物価格の高低に依存してゐる訳であつて、オーストラリ
アに於ける農産物生産者と羊毛生産者との分離も亦此の法則に支配され
た訳である。所で濠洲に於ては工業の發達が極めて遅れた為に機械生産
物は單価が非常に高く付き、寧ろ之等の商品を海外から仕入れる方が有
利であつた。其所で其れとの交換商品は他ならぬ羊毛であつて、土地は
殆んど牧畜業が小麦生産爲に使用されたのであつた。国内工業の發展
によつて之等の工業の保護の爲、関税政策が執られねばならぬことが主
張されたのは一八六六年であつた。当時、濠洲とは云ふものゝ、各州が
夫々一応獨立され、居り、州を異にするにつれ、土地問題にしろ、或は
工業の發達程度にしろ相違の跡歴然たるものがあつた。そこで此の関税

政策も各州によつて或は高率に、或は低率に施行されねばならなかつた。斯うして濠洲の工業的發展の基礎が作られたのである。其後、造船業、汽車、自動車等の普及が考へられ、濠洲は近代的産業の勃興を見るに至つた。

三 濠洲聯邦の樹立

濠洲聯邦が完全に樹立されるに至つたのは一九〇一年であつて、其れ迄は各州がバラバラの存在として政治、経済、文化の営みが行はれてゐた。此のバラバラの州を濠洲と云ふ一單位にまで結合せんとする案は既に一八四九年英國の政治家によつて考へられてゐたのであつたが、唯、それは其れだけのものに止まつて、熟する迄には至らなかつた。元來、濠洲の六州は夫々分離されたまゝに、相互關係の統合化等は促進されるべきものなき状態を呈して居たのであつて、之は一に交通機關の未発達によるものと思はれるが、他は濠洲經濟の段階が低位にあつて、各州を結

が紐帯を強固にすべき必要がなかつた事によるものと思はれる。開拓が
進行し、交通機関が発達し、工業の発展が急速に行はれる所に於ては、
早晚、国内市場の問題は提起されて来なければならぬ。更に貿易の發
展が加はる事によつて関税政策を適要したのであるが、此の政策を廻つ
て保護主義と自由貿易主義との対立が抬頭し、更に労働運動が附け加へ
られる事によつて、国内問題は全濠洲的立場に立たざる限り最早、一步
も解決に向つて進む事が出来なくなつた。丁度此の時、各州に於る唯一
の問題は外国労働力、就中、支那人労働者の入国禁止を廻る問題が擬せ
られてゐた。所で蘭色人を濠洲から閉め出さうと云ふ点に於ても濠洲は
全体として足並みが揃つてゐなかつた。更に交通機関の発達、関税率の
相違、対本国関係等、漸くにして複雑な様相を呈して来た為、各州に
於ては統一会議開催への要望が發せられるに至つた。此の国内問題の解
決の為にはどうしても聯邦會議の設置を必要とするを力説したのは、ニ
ューサウスウエールズのヘンリーパークス卿であつた。遂に一八八〇年

に其の成立を見た。所で此所で注目しなればならないのは、政治的に
は大州の合併が議せられたのであるが、経済的には自由貿易主義者と保
護主義者と更に労働組合派との夫々の利害関係の共通的地盤を作り出す
事が問題であつた。之等は互ひに利害関係を異にし、州によつて夫々經
済的地盤を異にしてゐたので、單純に一つのものに發展的解消を遂げる
事は出来なかつた訳である。パークスの盡力により、其の後統上への機
会が設けられたが總て失敗した。パークスの後継者はエドモンド・バート
ン (Edmond Barton) 及びアルフレッド・デイキン (Alfred Deakin) であつ
た。結局、會議に於て問題になつたのは、各州は当時、夫々の實力を持
ちまた歴史を有してゐるのであるが、統一的政治機関が設立されたやう
な場合に、統一機関と州機関との法律関係はどの様なものとなるか、と
云ふにあつた。余り統一機関に権力を持たせず、州機関の地位と歴
史とが採救されてしまつてはならぬといふ危惧が残つた。だが結局の所
はアメリカ型の聯邦制度が採用され、豫州聯邦政府の所管事務は国防、

税関、外交、外国貿易、郵便、電信事務、移民関係、航海等に限定される。更に聯邦議會は次の如く構成される。

又

聯邦議會

上院 (Senate)

定員三十六名、各州より夫々六名選出される

下院 (House of Representatives)

定員最少限七十二名、各州より人口数に従つて選出される

大体、斯う云つた案が一九〇〇年に全州の者によつて承認され、英本国の議會に於ても承認される所となつて、一九〇一年一月一日新しい自治領豫州は生誕を見るに至つたのである。

註

豫州の六州とは (1) ニューサウスウエールズ (2) タスマニア

(3) クウインズランド (4) ウェスタンオーストラリア (5) ヴァ

イクトリア (6) サウスオーストラリア である。

(四) 白豪政策を週る問題

白豪政策は即ち文字の示す通り白人のみによる濠洲を維持する事であり、有色人種を總て閉め出さうとする政策である。斯る政策の成立に觸れる前に少時、聯邦政府樹立以来の濠洲国内問題の概観を試みて見なければならぬ。

国内問題と云ふのは他ならぬ労働運動の發展である。労働者が高賃銀、労働時間の短縮、労働条件改善を意志通り獲得せんとする方法是先づ二の方向から初めらる。第一は労働組合を組織する事によつて、組合と企業主との集团的契約により、條件を吊り上げんとする方法。他は議會の中にも喰ひ込んで斯る法律を制定せんとする方法である。濠洲に於ても漸次此の氣運が醸成され、労働組合の結成が割る所に見られ、漸くにして国内問題としての深刻さを加へて来た。斯で斯る組合闘争は濠洲に於ては一八九〇年以後、大規模な形で行進したのであつたが、組

合側の失敗となつて終つた。労働運動は此の時に其の方法を他の一つの
ものに見出したのであつて議院進出によるものが即ち之である。即ち議
員として議院に列し、労働者に有利な法律案を提出し、之の通過を支持
して目的を達せんとする方法である。一九〇一年より、労働者側のメ
ンバーが聯邦議院に選出された。彼等が議院に席を占めた時に見たのは
二つの反対党、即ち自由貿易主義派、保護貿易主義派これである。所
で労働派が其の数を増加して来るにつれて、此の二つの党は反労働党とし
て合一する様になつた。此所に議院に於る労働党と反労働党の二つの対
立を見るに至つた。此の労働党の議院に於る目的は労働賃銀を高率化し、
労働條件を改善し、環境を改革するべき法律を通過させる事にあつた。
従つて反労働者を出来るだけ利用して之等の目的を遂行に必要なるべき
一切の手段を執る事は他ならぬ此の党出身者の義務であつた。

大体、斯る状態の中から白蠟主義の政策が産れ来つたのである。最初
、支那人苦力を濠洲に入れるについては、南極途上の勞力不足に悩ま

此てゐた豫州にとつては願つてもない救け舟であつた。当時豫州に這入つて来た支那人は契約労働であり、其の數も僅な状態であつた。所で例の舊金時代には支那人の側から積極的に移民して来たのであつて、此の急流をせき止める策としてウイクトリア州の如きは入國税を十ポンド課し、更に年々入頭税等も課したが、斯る方策によつては支那移民を阻止する事が出来なかつた。ウイクトリア州に倣つて其の他の州も入頭税、入頭税を賦課したが、依然として初果を現はさなかつた。所で支那人労働者に対して最も利害を感じる者は他ならぬ之等白人労働者であつた。支那人に限らず一般に有色人は白人よりも生活程度が低く、従つて労働が安くても雇主との間に氣安く契約を結ぶ事が出来る。而も極めて忠実であり、生産力も大である。此等の者の數が増大して行く事は經濟的には白人労働者の生活をおひやかす事となる。政治的には全白人にとり有色人種の脅威として現はれて来る。労働党が反對党を利用して之等有色人種排斥に対する法案を通過せしめんとしたのも、斯くの如く自党に

とつては債銀の脅威、反対党にとつては人種的脅威として一度に解決せ
んとしたのである。斯くして一九〇一年、即ち聯邦議會制確立の年に有
色人種排斥法が成立した。尔来、濠洲は白人帝國として、太平洋の南方
に豊富な資源を容して存在する様になつた。尚ほ白濠政策については後
述する。

〔五〕 大戦及戦後の濠洲

濠洲は以上の如くして開拓され、羊毛、鉦物、小麥等、豊富な資源を産み出す地域となつた。英帝國の植民地経営に於て、此所はアメリカの如く、本國から完全に分離せず、また印度の如く、巨大な数に上る有色人種を統治する事なく、植民地経営として成功した地域となつたのである。第一次世界大戦が初まつた時、濠洲は初めて國際社會の荒波に出遭つた。本國の要請により、濠洲兵は埃及に派遣された。此の派遣軍は英本國の爲に相當の役割を演じた。次から次に濠洲兵はヨーロッパに送り出されて行き、聯合軍の興敗を一身に背負つて、或はパレスティンに或はフランスに戦つた。一九一八年、第一次大戦が終つて、之等の兵達は再び濠洲に歸つて來た。之等の者達は濠洲に歸つてから主として農耕（小麥の生産）、牧畜に従事した。巨大な額に上る小麥と羊毛が産出され、其の爲に濠洲は直に生産區劃の問題に遭遇せねばならなかつた。

羊毛及小麦の國際的價格が暴落した爲に、一九二八年以降、濠洲は失業と悲惨に見舞われねばならなかつた。世界大戰以後の濠洲は唯に濠洲のみ、の位置に立つ事が出来なくなり、世界經濟の一環として益々左右されねばならなかつた。國際聯盟と云ふ一つの觀念で作り上げた機関が一時的にも妥當した國際社會には濠洲は未だく英國の力に依つて存立する地位が與へられる。國際社會の均衡が破れて來る場合には濠洲は濠洲として地位を保つて行く爲の基礎を必要とする様になつた。

英本國の支配方策の足場としてものが、國際社會の柱格として感ぜられる様になつた時、英國植民地は夫々の紐帶關係を反荷し、新しい結び付きを必要とする。果してアングロサクソンと云ふ血のみが永久の紐帶であるかどうかは、今世紀に於る最も注目すべき歴史の證明となるであらう。大東亞戰爭が勃發する事によつて、解決の鍵は日本が握る事となつた。濠洲は自己が存立して行く爲には日本を無視する事が出来なくなつた。日本の一擧手は世界史に於ける重要な基軸をなすものと云われねば

ならない。濠洲は二十世紀の曙に新しく生誕した。生誕後約四十年にして此の危機に遭遇した譯である。日本に依つて主張される東亞共榮圈の確立に積極的に参加する事こそ新しい濠洲生誕の契機である事は云ふ返もない。

三、オーストラリヤと東洋移民

〔一〕 白濠政策の立法・外交小史

アジアから来る移民に對してオーストラリヤが取つた態度は、一九〇〇年以來白濠政策の適用として表明されてゐる所のものであつて、その政策は爾來、行政的に一貫して取られて來て居る。そこに含まれてゐる主要原理に於ては爾來、何等の變化も見せて居らない。

この原理は一八六〇年に迄その期限を求め得るのであつて、濠洲民衆の心理に深く根ざしてゐるものである。一九〇〇年前の濠洲はそれ／＼獨立せる植民地を形成してゐたのであつて、植民地間に於る政策の不均衡は、何らかの濠洲統一體結成への氣持を醸成する地盤となつてゐたが、特にアジアから来る移民に對して何等統一的限制法規がなかつたといふ点に、各植民地は對策を練る必要があつた。此の事情は既に述べた所であつて、二、三の植民地に於ては個別的に有色人種に對する制限を行つて居た。一九〇一年に始めての聯邦議會が開催された時に、移民問題は早速討議の的となり、濠洲は過剩なる東洋人種を閉め出す事によつて保全されねばならないといふ意見の一致を見るに至つた。そこで此の意見は法制化せられるに至り、白人のみに依つて濠洲を建設して行かんとする所謂、白濠政策が制度的に、しかも濠洲一帯として取られるに至つたのである。

一九〇一年移民法が通過した場合に於る議論の中心は、有色人種を閉め出す方法は直接的たるべきか、それとも間接的たるべきかに主として置かれた。議會に於る多くの代表者達は、若しアジア人の流入が押し止めらるべきものとするならば、その排外は最も明らかな、最も公けな方法で宣言されねばならないと云ふ見解を持した。所で英本國に於ては、日英間に存在する友好關係を危殆に瀕せしめるやうな方法は、成るべく避けたいと云ふ氣持があつた。そこでオーストラリア側が抱いた理想が、若し現實に効力を持つやうになると、唯ヨーロッパばかりでなく、アジアに於て危険な空氣を不必要にも惹き起す事になるだらうと云ふ氣持を表明した。この氣持を最も強くオーストラリアに表明した者はヨセフ・チエンバレンであつて、一八九七年に於るロンドン植民地會議に於る彼の演説は、この辺の事情を充分物語つて居ると思はれる。

「諸君に一つお尋ねしたい事がある。諸君は、英國の傳統といふ事

をお考へになつて居らつしやるか。英國は自己の氣に入る人種、氣に
入らない人種に差別をつけ、彼等が有色人種だからと云ふ理由で、或
いは自分達の人種とは違ふと云ふ理由で彼等を排斥するやうな事はし
なかつたのである。予はそれ故、帝國領内住民の感情を傷
けない様な發言形式をお取りになる事がいいであらうと思ふ。又一
方同時にそれ水が、ホーストラリヤ植民地を充分に保全する道だと考へ
る。

斯うした議論は、當時濠洲が考へて居つた移民政策を、外交的な傷害
なしに遂行させたいと云ふ氣持を抱いて居た大多數の議員達の心をゆす
ぶつた。そこで彼等は、一八九七年第一次ネータル・アクトを起草する
事となつたのであるが、此のネータル・アクトは言語、又は教育試験の
手段を用ひて、移民制限を行はんと意圖したものである。
此の場合に於る語學試験と云ふのは、随分難解な注文を持ち出して居た
のであつて、移民者には殆んど不可能と思はれる要求を答案に提出する

と云ふのである。

此の案は現實に一九〇一年の第十七次聯邦移民制限法となつて表れた。此の結果、日本人はカナカ族、印度人、支那人等と一把總からげに考へられた事になるのであつて、之に對する日本側の抗議が當然過ぎる程當然であつた事は云ふ迄もない。

所で、之に對する濠洲政府の解答は、移民を制限する権利は飽く迄國內的主張として、他國の干渉を受けざる領域であらねばならないと云ふ見解を一般に取つた。かかる見解が如何に法的妥當性のヴェールを被せて主張されようとも、結果に於て日本の不滿とせる所を現實に解決するものではなかつた。最初此の法案が起草せられた時に、英本國に於てばかりでなく濠洲政府に於ても亦、出来るだけ外交上の紛糾を避けたいと云ふ氣持が濃厚であつた事は、既に述べた所であるが、實体に於て同じものであるとするならば如何に粉飾を凝らしても與へる結果は同じ事なのであつて、日濠關係の破端が既に此の時に始つたのは當然と云はね

ばならない。

斯うした日本との外交的の連鎖があつた以外は、自濠政策の歴史は殆んど故障なく押し進められて来た。此の法を破つて濠洲内に流入する者に對しては、極めて厳格な罰則が適用された。そして此の政策を遂行する爲に、紳士協定の思想の擴張に依つて他國の共同を確保せんとする一つの運動が起つた。しかも此の運動は濠洲にとつては、著大な効果を納めたものであると云ふ事が出来るであらう。

斯うして自濠政策の成立を廻つてはかなりの外交的紛糾があつたにもかかはらず、最近に於ては國際間に於て、此れは既成事實として取り扱はれて居る。一九三三年六月三十日の國勢調査に依れば、全人口六六二九八三九人の中四九八四六六人が有色人種であつて、全人口に對して僅かに〇・七五パーセントを占むるに過ぎない。此等のものは制限法規制定前に入國したものであつた。別に何等嚴しい制限を設ける種の社會勢力を彼等が持つものではない事は明かである。

〔三〕 白濠政策の社會的、政治的、經濟的基礎

白濠政策の制定を廻る法制的、外交的事情に就いては、大略以上の如くであつた。惟、此の政策が如何なる社會的、政治的、經濟的基礎の上に立つて居たものであらか、に就いての検討を計みる事としよう。

現實には、經濟的要因が當時の濠洲民衆にとつて最も影響力のあるものであり、又最も深く感じられてゐた所のものである。政治的、社會的論議が一層高まるにつれて、經濟的要因は之等との關聯に於て取り上げられるに至つた。制限法に關する議論を通じて考へて見ると、指導的政治家はオーストラリヤ人の習慣並に思想が、危殆に頻せられて居ると云ふ事を訴へ、白濠政策は此の危殆に頻せしめられた習慣、思想を救済するものであると云ふ見解を述べた。即ち、オーストラリヤ社會を信念と法律の同一原理・言語と宗教の同一影響・同一な國民的生活慣習に依つ

て結び付けらる政策が、外ならぬ白濠政策なのだ」と主張した譯である。

アジア的移民（殊に支那人）は、外的要素として止り、何等住民の中に溶けこまないであらうと云ふ事が、議論の對象となつた。亦、彼等は白色人種と同化せず、その生活態様を變へないばかりか、オーストリアの理想をも受け入れないであらうとも云はれた。更に支那人は四千年來の文明に培はれた精神を持つて居るので、新しい理想や新しい経路に改宗しないのだと云ふ事も言はれた。之と同じ議論が印度移民及び日本移民に對しても向けられた。斯う云つた情勢から政治家の胸の中に抱かれて居た考へは、若しアジア移民を自由に濠洲に吸引すると云ふ事にならば、濠洲はその人種的・社會的統一を失ふばかりでなく亦、その國民的性格をも喪失する事になり、結局アメリカ合衆國と同じ様な人種的問題に、直面しなければならぬと云ふ理由にあつた。

斯うした議論から、政治的論決が引き出されて来た。アジア的移民が飽く迄その自己の體内に培はれて来た傳統を固守する限り、彼等は濠洲

の民主主義原理を理解し、そうにもなく、又、その建設に参加する事も出来ないであらうと云ふ事が既決された。斯うなれば濠洲の政治機構は民主主義的性格を維持する事を止めねばならぬ事になるし、従つてその統治は代議政体を維持し得なくなるであらうと云ふのである。即ち、濠洲社會内部に政治的不平等關係が発生し、アジア人と白人、此の二つのものの分裂に依つて濠洲の政治生活が、害はれるであらうと云ふのである。最後に、假令アジア人が濠洲と同じ政治的權利を獲得し行使するにしても、彼等の見解は元來全く濠洲人のそれと異つてゐるのであり、従つて其處に相互の對立抗爭狀態が発生するに至ると云ふのである。根本的には之等大抵の議論は、濠洲政治家にとつては依然として妥當性を持つものであると認められて居つたし、又現在もそう考へられて居る所である。白濠政策は、飽く迄濠洲的觀点を嚴しく守つたと云ふ事が言はれる。之に對して外國側から浴びせられた批評は、結局、

「濠洲の信念・理想・宗教・習慣・生活などを防衛しよう」と云ふ所謂

國民的自己保全と云ふ事は、國民的利己主義と言はるべきものであり、廣大な土地を僅かな白人を以て獨占しようと言ふ魂膽は、神の意志に叛くものであり。

と云ふにあつた。斯うした批評は必ずしも外國側からのみ浴びせられたのではなく、濠洲内部に於ても少数者に依る貪慾は獨占として非難を浴びせられた。之に對して濠洲側が應酬した見解は、「濠洲が如何に廣いと言へども、其の中にはゴビ沙漠に次ぐ廣大な不作地帯があるであつて、之を除外して考へるならば外國側が浴びせてぬり少数者の獨占と云ふ事も實質的には無意味な主張となり、單なる感情的主張としてしか受け取れない。」といふのであつた。

イースト教授は次の如く述べてゐる。「濠洲人達はスーパの縁に住んで居るのだ。この縁は少くも部分的には肥沃である。だが、鉢の底は水の供給がなげれば荒涼たる沙漠である。最も樂觀的に見積つても十九億四百萬エーカーの中、約四百萬エーカーの耕地があるに過ぎない。斯

くてオーストラリアは可住地域として取りれる場合に、スペインがイタ
リアの地位に遠引き下げられる。之には尚一層の研究と議論を重ねなけ
ればならないが、オーストラリアが自然的障害に依るハンディキャップ
を持った相対的に貧しい國であると云ふ事實を、否定する譯にはいかぬ
と思ふ。一更に斯う云つた見解に對してグリフィス・ラー教授は次の如
く計算してゐる。一全大陸の僅か二パーセントが定住に適し、三四パー
セントが田園に、三パーセントが熱帯農業に、残りの四二パーセントは極めて
乾燥せる地域であるために、殆んど栽植不可能の地域である。レと
斯うしたオーストラリアを廻る論争は各方面から限りなく續けられた
のであつたが、結局、オーストラリアを廻る論争は各方面から限りなく
續けられたのであつたが、結局、オーストラリアが大人口を受け入れる
餘地の想像以上に限らるべき事に、意見の一致を見るに至つた。そして
斯うした意見を基礎として濠洲當局は、各國の非難が現實の濠洲に對す
る認識不足に基づいて居る事にある事を、極力主張したのであつた。

更に濠洲政治家達は、濠洲の地理的不毛とその人口増加率との関聯を
稱へ始めた。濠洲人口の増加率が急速である場合には、移民制限に對す
る非難はその正當性を喪失する事にならうと言ふのである。又現実に一
八八一年から一九二一年に至る四十年間、濠洲の人口増加率はその他
國よりは、一層急速であつた事は否定出来ない。

大体以上の如き見解が表明されて居つたが、白濠政策を成立せしめる
に至つた経済的要因が、果して何であるかについて考察する事は、其水
が最も基幹的なものであるだけに重要性を持つものである。斯う云ふ観
点から其の支配的な要素は、南オーストラリアの首相によつて次の如く
述べられて居る。即ち、「アジア人の生活慣習は濠洲に住む事に依つて
金を貯め、その結果ヨーロッパ人は餓死する様になるだらう。」と言
ふのである。斯うした見解が取られたのは一八八十年であつたが、此の
見解は次第に移民制限法論争に於ける経済的な論議の中心を形成するに
至つた。そこで大部分のアジア移民が低社會から来た若カであり、しか

も雇傭條件に選り好みをしないと云ふ事が、排外理由として述べられた。彼等は長時間、低賃金に満足し、周囲の濠洲人に對して落け込もうとしないと云ふ事が主張され、之れがオーストラリア人の生活水準を引き下げる力として作用するばかりか、遂には労働市場を支配し、濠洲人を閉め出すに至るであらうと云ふ事が喧しく論議されるに至つた。此の事情に就いては既に觸れた所であるが、斯う云ふ理由で特に労働組合、労働黨は、アジア人閉め出しの原理に満腔の支持を與へるに至つた。此の労働組合及び労働黨の態度が非常に峻烈を極める様になつたので、濠洲労働者はそれだけ救はれる事になつた譯である。良かれ悪かれ濠洲に於る組合労働は、一方に於てはかかる移民排斥に依り、他方に於ては労働黨を通じての條件改善に依り、政治活動の勝利を味つた譯である。此の様な事情は移民制限法を廻る問題の既定にある、根強い経済的要因であつた。

斯か多ものの上に人種的な思想が築かれ、此の人種的な思想を露骨に

表明する事が、諸般の事情から問題となつた爲に、外交的なセスキエを
加へ、白濠政策を遂行したと云ふ事が出来る。だが、白濠政策が成功し
たかしないかは、歴史の長い證明期間を必要とする。

一時的には成程、成功したであらう。だが一方に於て、オーストラリア
民衆が東洋諸國民を激怒せしめた危険は、已れが産み出した所のもので
ある。此の禍根かどの様な裁きを受けるかは、二十世紀中葉に於る最も
興味ある一事件だと云ふ事が出来よう。大東亜戦争勃發に依り、濠洲の
英國に對する、紐帶關係が日々修正されつつある事は、實は當然過ぎる程
當然の事實なのであるにも関わらず、白濠政策が飽く迄死守さるべしと云
ふ聲明は、繰り返し繰り返し聞かされる所である。
其の解決の鍵は、既に日本の掌中に委ねられて居ると云ふ事が出来る。

* L. C. ROSS: *Australia and the Far East*, 1935, P. 40-41

四 濠洲の人口問題

濠洲大陸及タスマニア島とを合せると約二九七四五八一平方哩で、アメリカ合衆國を殆んど全一の面積を形成して居り、大英帝國全地域の約五分の一の面積を占めてゐる。此の廣大な地域の中、一、〇六七、三五七平方哩以上の地域が降雨量年一〇インチ以下で、大部分は沙漠地帯となつてゐる。濠洲内陸地帯か之である。此の低降雨量地帯が果して人間生活に資し得られるかどうかについては、様々な意見が表明されてゐるけれども、兎も角、全体としての濠洲は世界に於て肥沃なる地域の中に数へられてゐる。更に濠洲は鑛物資源に恵まれてゐる。石炭資源は殆んど大英帝國と同様な量を持つてゐる。

前述の如く、ヨーロッパから濠洲に移住民が未航したのは一七七八年位から起原して居り、原住民を除外するならば、濠洲聯邦の人口は約六七、〇〇〇人、九〇パーセント以上が英國系である。濠洲の發展は

内部抗争や或は外部からの侵入から干渉される事なく進んだ。敵艦は濠洲本土に一發も落下しなかつた。

唯南アフリカ戦争と、一九一四年から一八年に渉る世界大戦の時に濠洲の青年が犠牲を甘受したただけである。濠洲は今迄の所はたとへ、自国獲得の爲の——聯邦樹立等——運動があつたとは云へ、平和な國家生活を出来たと云へる。

此の廣大な地域を持つた濠洲が巨大な人口を收容し得る事は明瞭である。それならば果して幾何の人口量を收容し得るであらうか。

此の問題を廻つては諸家の間に意見が夫々異つてゐる。ベナム博士は一〇〇〇萬人から一五〇〇万人の間の量が最適度——一人當りの平均的福祉の最大の状態——であると云つてゐるし、またハンチントン教授 (Hilswort The Mountington) は、思ひもよらぬ発見や生活標準の低下が見られぬ限り最大数は二千萬を越えざるものと推定してゐる。イースト教授も同様な見解を表明してゐる。先述の如く彼は次の如く述べてゐる。

Wheat on Pacific, 1925.

一住民はスープレの縁に住んでゐる。其の縁は肥沃であり、之に反し底は水の供給がなければ荒廢たる地域である。灌溉計畫を立案すると云ふ希望すら持てない地域である。最も樂觀的な評價を加へても十九億四百万エーカーの中、耕作可能なる地域は僅かに四千万エーカーに過ぎない。斯くの如くして濠洲が可住地域として考察される場合、スペインかせいせいイタリー位の地位に縮小する事にならざる譯である。しと、テラ教授 (Griffith Taylor) はもつと樂觀的な見解を表明してゐる。即ち濠洲がヨーロッパ程の飽和状態に達する人口は約六千五百萬であらうと云ふのである。メツサー、マレット、ワツダム等も此の数を大体認めてゐるやうである。リネヤード博士は濠洲が一億の人口を扶養し得る小麦を充分生産し得るものとしてゐる。濠洲資源の全貌が判明するにつれて低い評價は次第に高い評價に改められつつある。

濠洲人は移民制限、出生率低下によつて、此の地域を港の開き水た土

地、空虚な搖籃に表換した譯である。所で濠洲に於ては他の國と比較するに例外的な急速度を以つて人口が増加した。一八八一年から一九二〇年に至る四〇年間に濠洲人口増加率は年一〇〇〇人に付き二三人であつて、唯之より高いものとしてニュージーランドの二三人があるきりである。合衆國は第三位で一九人、第四位はカナダで一八、一方日本は十一、イングランド及ウエールスは九、スコットランドは七であつた。一九二一年から三三年迄の間に一九四一〇五人の増加を見た。この中約四分の一が移民により、四分の三は死亡を越える出生の増加によつたものである。一九二一年から三一年に至る各國の表は次の如く示される。

前表に於て一九二一—二六年迄の期間に於る濠洲は其の人口増加

國名	人口1,000人=付年増加率	
	1921—26	1926—31
オーストラリア	21.5	15.0
ニュージーランド	19.5	12.5
カナダ	13.3	19.7
合衆國	16.7	12.6
和蘭	15.3	13.9
日本	14.2	14.2
ベルギー	10.3	6.2
デンマーク	10.1	6.5
イタリア	9.1	2.2
フランス	7.6	5.3
ドイツ	7.3	5.6
イングランド及ウエールス	6.2	4.7

の期間に於てはカナダの次に低下した事が見出される。

濠洲人口が斯くの如く其の増加率を低下させて行きつつある状態に對して、小人数による獨占と云ふ批評が各國から浴びせられたのは可成古い。所で既に述べた如く、濠洲は此の批評に對して常に内地の不毛地帯を擧げ、現実の可住人口は既に最適に達した事を主張した。即ち經濟的福祉の觀念で、現在量をあく迄維持すべきものとしたのである。に本根本的には自濠政策は人種的なものであつて、此の人種的問題を明確に意識せしむる動機となつたものが外ならぬ經濟的問題である。就中有色人の低賃銀である。此の事は既に述べた通りである。更に一つ附加されねばならぬ事は濠洲が他の大陸に見られる如き都市、住居の形態とは異つたものを持つてゐると云ふ事である。工場にしろ、住宅地帯にしろ闊達な面積をとつて居り、ヨーロッパやアジアに見られる如き狭隘な都市景觀を呈して居らないと云ふことである。従つて其の様な生活

形態を持つた地域が人口が飽和に達したと主張しても、他の地域から見
たら、勝手な言ひ分だと感ぜられろのは當然である。土地の廣狭は相對
的なものである。彼は廣すぎると云ひ、之は適度と云ふ、何れも相對的
な標準に基いてゐる。だが少くとも次の如くは言ひ得るであらう。濠洲
は白濠政策によつて有色人を閉め出した。だが他方に於て白人のみを移
入してゐた。白人なら入植して差支へなしと云ふ政治的主張はデモクラ
シーの維持と白人優位の人種觀とに根ざされてゐる。果して濠洲が現在
人口を以つて最適度だとするならば何故に白人労働力を必要としたか。
經濟の分野に於て労働力を必要としたが爲ではないか。
濠洲人口が最適度だと云ふ主張は人種的偏見を露骨に表明しない爲の單
なる外交辞令たるに過ぎない。現に一九三一年から二五年迄の五年間
に移入民から移出民を差引いても未だ一八三、三六六人の超過があつた。
濠洲は資源が豊富である。此の資源は白人のみに貸せられてゐる。アン
グロサキソンの國際支配力が此の事を可能ならしめた。

だが濠洲の人口最適度性の政治的主張にも拘らず、現実政治は正に之と反対の現象を呈してゐる。一九二一年——二五年迄移入超過一八三二六六人あつたものの、一九二六年から三〇年迄は一二九、九〇七人に低下した。所で更に一九三〇年——三二年になると、移入民より移出民の方が多く、統計によれば二一、六一一人の人間が濠洲から結局消え失せた。此の時の原因は生産過剰による大恐慌である。だが景氣が恢復して来ても、在来の如き移入民が来航しなかつた。何故なら濠洲は其の移入労働力を英本國に仰いでみた。本國人口が移出の限界に達すれば濠洲が在来の如き移入民を期待出来ないのは當然である。

之ばかりではない。濠洲自体の出生率は年々低下を續けてゐる。クツクススキの計算によれば一九三二——三三年の濠洲純再生産率は〇・九七六である。

濠洲がこの率に止るとしても其の将来人口は悲觀的狀態を呈してゐる事は明かである。年々純再生産率が低下しつつある現状を以つてすればやが

て白人帝國の危機は現實化するであらう。移入民の減退と出生の減退、此の二つの要因は濠洲の人口問題として明かに強く人々の心に感ぜられ
てゐる。濠洲があくまで現状を以つて維持さるべき政治体制とし、白濠
政策を依然として固守するならば、それだけで人口の側から自滅する要
素を有する事明かである。民主々義國の人口状態は自滅的様相を呈せ
らるゝ。濠洲も亦其の一つたる事、既に述べた通りである。

五、現在の濠洲の統計的観察

(一) 人口

一九三三年六月三十日施行のセンサスによつてその人口状態を見ると次の如くである。

第一表は其の時に於る男、女別人口数を現はすものである。ニエーサウス、ウエールス、及びクトリアは濠洲肉拓史上、最も古い州であり、現在に於ても人口は圧倒的に多い。人口密度の莫大でウイクトリアは百平方哩に付き二、〇七一人で最も大きく、次いで首都タスマニアの順になつてゐる。

第一表

州名	人口		面積 平方哩	人口密度 百平方哩につき
	男	女		
ニエーサウスウエールス	一、三三八、四七一	一、二八三、三七六	三〇九、四三三	八四一
	一九三三年六月三十日センサス			
	総数			
	二、六〇〇、八四七			

第二表

同じセンサスに於る、婚姻、出生、死亡の統計は第二表である。

グイクトリア	八七、八八四	九〇三、二四四	九一七、〇一七	一八二、〇六一	二、〇七一
クウインスランド	六七〇、五〇〇	四九七、二一七	四五〇、三二七	九四七、五三四	一四一
南オーストラリア	三八〇、〇七〇	二九〇、九六二	二八九、九八七	五八〇、九四九	一五三
西	九七五、九二〇	二二三、九三七	二〇四、九一五	四三八、八五二	四五
タスマニア	二六、三一五	一一五、〇九七	一一二、五〇二	二二七、五九九	八六八
北部地域	五二三、六二〇	三、三七八	一、四七二	四、八五〇	〇、九
豪州首都	九四〇	四、八〇五	四、一四二	八、九四七	九五二
総数	二、九七四、五八一	三、三六七、一一一	三、三六二、七二八	六、六六九、八三九	二、二三

州	事	項	結	管	出	生	死	七	出生・死亡
									(出生・死亡)
ニューサウス、ウエールズ			二四、五七九		四七、三一九		二六、一〇五		二一、三一四
ウイクトリア			一七、一一三		三〇、三四四		一八、九五五		一一、三八九
クウインズランド			八、八五五		一八、九九二		九、二〇一		九、七九一
南オーストラリア			五、四八七		九、四一〇		五、五三九		二、八七一
西			四、一五三		九、一四一		四、二三四		四、九〇七
タスマニア			二、〇八二		四、九〇七		二、二八八		二、六一九
北部地域			六七		一〇二		六九		三三
濠洲首都			七五		二〇二		六〇		一四〇
総数			六三、四一一		一二〇、四一五		六六、四五二		五三、九六四

ニエーサウス、ウエルス

年次	男	女	總計	一平方哩当人口
一八八一	四一〇、三一一	三三九、六一四	七四九、八二五	三、四二
一八九一	六〇九、六六六	五二七、四七一	一一三七、一三七	三、六三
一九〇一	七一〇、二六四	六四五、〇九一	一、三五五、三五五	四、三七
一九一一	八五七、六九三	七八九、〇三六	一、六四六、七三〇	五、三二
一九二一	一、〇七二、五〇一	一、〇三八、八七〇	二、一六一、三七一	六、七九
一九三三	一、三二八、四七一	一、二八二、三七六	二、六一〇、八四七	八、四一
一九三九	一、三九六、三三四	一、三七四、一二四	二、七七〇、三四八	八、九五

年次	結婚	出生	死亡	出生过剩	一年以内二死亡 七九幼児千人中
一九三五	二、三、三六一	四四、六七六	二四、五四七	二〇、一二九	三九、〇

ヴィクトリア

一九三六	二二、八七五	四六、一九三	三四、三七六	二一、八一七	四三、五
一九三七	三三、一八八	四七、四九七	二五、三三五	三三、三六三	三〇、七
一九三八	二四、五七九	四七、三一九	二六、一〇五	二二、三二四	四一、八
一九三九	三三、四七一	四八、〇〇三	二六、八一五	二一、一八八	四一、〇

一九八一	四五、六二三	四〇、九四三	八六、五六六		
一九九一	五九、八〇八九	五四、七五一	一一、三九、八四〇		
一九〇一	六〇、三七二〇	五九、七、三五〇	一、二〇一、〇七〇		
一九一一	六五、五九一	六五、九、九六〇	一、三一五、五五一		
一九二一	七五、四七二四	七七、六、五五六	一、五三一、二八〇		
一九三三	九〇、三、二四四	九一、七、〇二七	一、八二〇、二六一		

年次

男

女

総数

クウインズランド

年次	男	女	総計
一九七〇	六九,二二一	四六,〇五九	一一五,二七二
一八八〇	一一四,〇一三	八七,〇二七	二〇一,〇四〇
一八九〇	二二,三,二五二	一六,八八六	三九,二二六
一九二〇	二七,四,六八四	二一,九一六	四九,三八七

年次	人口	結婚	出生	死亡	出生/過剩
一九三五	一八三九,三八一	一五,四〇九	二七,八八四	一八,四五六	九,四二八
一九三六	一八四七,八四一	一五,九一五	二八,八八三	一八,七七八	一〇,一〇五
一九三七	一八五六,〇三三	一六,二二六	二九,七三一	一八,六一五	一一,一一八
一九三八	一八六七,八一八	一七,一一三	三〇,三四四	一八,九五五	一一,三八九
一九三九	一八八八,九四二	一七,三六八	三〇,四九三	二〇,一六九	一〇,三二四

年次	出生総数	私生児	死亡	結婚	出生超過
一九三五	一七、六八八	八、六五五	八、八五一	八、二八〇	八、八三七
一九三六	一八、七五五	九、〇八八	八、五九三	八、三〇六	一〇、一六二
一九三七	一九、一六二	九、一〇〇	九、〇〇六	八、三五三	一〇、一五六
一九三八	一八、九九二	九、一七七	九、二〇一	八、八五三	九、七九一
一九三九	二〇、三四八	一〇、〇〇五	九、五三〇	九、一〇八	一〇、八一八

一九四〇	三二、五、五一二	二七、三、五〇三	五九、九、〇一六		
一九四一	三九、六、五五五	三五、四、〇六九	七五、〇、六三四		
一九四二	四八、一、五五九	四三、五、一七七	九一、六、七三六		
一九四三	五二、五、二七一	四七、八、八七九	一〇〇、四、一五〇		
一九四四	五三、〇、三七二	四八、五、五五五	一〇一、五、九二七		

ウエスタン オーストラリア

年次	人口
一八八一	一一五、七四五
一八九一	一四六、六六七
一九〇一	一七三、四七五
一九一一	一九一、三一一
一九二一	二一三、七八〇
一九三三	二二七、五九九

年次	出生	結算	死亡	出生超過
一九三五	四、四五六	一、八七四	三、三五三	一、一〇三
一九三六	四、五八一	三、〇七三	二、三八七	一、一九四

サウスオーストラリア

年次	出生	結婚	死	出生超過
一九三五	八、三七〇	四、八四五	五、一六三	三、二〇七
一九三六	八、九一一	五、一八二	五、四六四	三、四四七
一九三七	八、九八五	五、三五四	五、五四七	三、七三八
一九三八	九、四一〇	五、四八九	五、五三九	三、八七一
一九三九	九、六一八	五、六七〇	五、七三九	三、八七九

一九三七	四、八四一	三、〇四二	三、三二五	三、六一六
一九三八	四、九〇七	三、〇八二	三、三八八	三、六一九
一九三九	五、〇〇四	三、二六四	三、四二六	三、五七八

年次	男	女	総計
一八七六	一〇九、八四一	一〇二、六八九	二一二、五二八
一八九一	一六三、二四一	一五三、三九二	三一七、五三三
一九〇一	一八〇、四八五	一七七、八六一	三五八、三四六
一九一一	二〇七、三五八	二〇一、二〇〇	四〇八、五五八
一九三一	二四八、二六七	二四六、八九三	四九五、一六〇
一九三三	二九〇、九六三	二八九、九八七	五八〇、九四九

更ニ濠洲人口を人種別ニ見れば、次表の通り総人口中、純歐洲人が
 九九、二五%で殆んど全部と云つてよい。自濠政策の效果歴然たるもの
 がある。爾余の者の中では混血が、四一%実数にして約二万七千人、
 次いで支那の、一〇、八四六人の順に存つてゐる。

人種別人口 (一九三三年六月三〇日國勢調査)

種別	人口	割合
合計	六、六二九、八三九	一〇〇
他	六、五七九、九九三	九九、二五
支那人	一〇、八四六	〇、一六
シリア人	三、八八〇	〇、〇四
日本人	二、三四一	〇、〇三
印度人	三、四〇四	〇、〇四
マレー人	九、六九	〇、〇一
和ネシア人	二、三三八	〇、〇三
其他	二、〇五二	〇、〇三
混血人	二七、〇六六	〇、四一

次に臺灣人口中、 nationality 別人口であるが、同じく一九三三年のセンサスでは、臺灣及ニエーランド及夫々の領地のものが八七、〇九%に

大部分の者が濠洲地域又は其の周辺で産れた事にする。之に次いで英本國、アイルランドの順になつてゐる。

生國別人口（一九三三年六月三日國勢調査）

カナダ	三、九二〇	〇、〇六六
アメリカ	二四、五五九	〇、三七七
其他 歐洲	五一、五八三	〇、七八八
イタリー	二六、七五六	〇、四〇〇
ドイツ	一六、八四二	〇、二五五
アイルランド	七八、六五二	一、一八九
英國、ウエールズ、スコットランド	六三三、八〇六	九、五五五
濠洲及ニュージブラント及夫々の領地	五、七七七、三〇三	八七、〇八九
合計	六、六二九、八三九	一、〇〇〇

米	六、〇六六	〇、〇九
其	一四、三五二	〇、二二
他		

次いで宗教別人口であるが総人口、六六、九八、三九人の中、クリスチャンが五、七、七、三、八人であるから全体のうちクリスチャンの占むる割合は八、六%で大部分を占むるものと云ふ事が出来る。同じクリスチャンと云つても各種様々の宗派があるのであるから、茲を大別すれば英蘭教会派が四四、七、八%で一番多く、次いでローマンカトリックの二〇、二、八、プロテスタントの順になつてゐる。

宗教別分布

内	課	總	数
クリスチヤン		五、七、七、七、三、八	一〇、〇
シヤーチオーブ		三、五、六、五、一、一、八	四四、七、八
イングランド			

其 他	救 世 軍	ポ ロ テ ス タ ン	ル ー セ ラ ン	コ ン グ レ ゲ ー シ ョ ナ ル	チ ヤ ー チ オ ー ブ ク ラ イ ス	カ ソ リ ツ ク	パ プ テ イ ス ト	ポ レ ス ビ テ リ ア ン	× ソ ダ ス ト	ロ ト マ ン カ ソ リ ツ ク
七 七、 七 六 五	三 一、 二 一 〇	七 三、 七 六 四	六 八、 八 〇 三	六 五、 二 〇 二	六 三、 七 五 四	一 二 七、 五 四 二	一 〇 五、 八 七 四	七 一 三、 二 三 九	六 八 四、 〇 三 二	一、 一 六、 四 五 五
一 三 六	〇、 五 四	一、 二 七	一、 〇 六	一、 一 四	一、 一 〇	三、 二 三	一、 八 五	一 三、 四 五	一、 一、 九 四	二 〇、 三 八

(二) 資源

農産物 一九三七年 — 一九三八年

穀物	總面積	總產額	單位面積產額
小麥	一三、七三四、九五 <small>エカ</small>	一八七、二五五、六七 <small>ガクシエル</small>	一三、六三 <small>ガクシエル</small>
燕麥	一、四〇八、四二二	一七、一六五、〇六一	一二、一九
大麥	六二五、四九五	一一、五三四、〇八二	二〇、五六
玉蜀黍	三二〇、二〇七	六、八一六、六一二	二一、三九
乾草	三九八、四六五	三、四二三、七五三	一、一五 <small>トン</small>
馬鈴薯	一一四、三八五	三、四五、三八二	三、〇二
甘蔗	三五八、一八七	五、四九四、六一〇	二一、四八
甜菜	四、〇四六	四八、五九四	一二、〇一

合	他	石	錫	銅	鋅	金	鑛
計	鉾 物	炭			鉛		物
三、四八五、〇一〇	四、九四二、三四〇	七、六六二、二二二	八、六六、七四八	一、一六三、四六八	五、八二〇、四四〇	一、二〇二九、七九二	一九三七
三、二四二、〇八二	四、五〇五、四六〇	七、五三九、六二二	七、一一、六二八	八、九三、〇八〇	四、七四四、四三六	一、四、〇二六、六一五	一九三八

果樹園と果実園	葡萄酒	葡萄酒
二七七、一三一	一	一三五、一七一
九、二〇四、二七三	二、四三〇、〇三一	五〇四、六五五
三三四、〇三二	一、四一一、七三四	四、四〇二

生 産 物	農 業	牧 畜 業	採 乳 、 家 禽 、 蜜 蜂 、 農 耕	林 業 、 水 産 業	鉱 業	工 業	合 計
一九三四—三五	六八、五八七 <small>千和元</small>	七四、五五六	四四、七六三	一〇、八五六	一九、九四九	一三七、六三八	三五六、〇六〇
一九三五—五六	七五、二〇〇 <small>千和元</small>	八九、七〇〇	四八、五〇〇	一、六〇〇	二二、五〇〇	一五五、九〇〇	四〇三、八〇〇
一九三六—三七	九一、四〇三 <small>千和元</small>	一〇五、四九九	四九、八八六	一、七六五	二七、三八一	一七二、八一	四五六、七四五
一九三七—三八	九三、二二九 <small>千和元</small>	一〇〇、七九四	五七、六四一	一四、七五五	三二、四三四	一八八、〇六一	四八六、九一四

(三) 貿易關係

主要國別輸出入

輸出入	英 本 國	カ ナ ダ	ニユージーランド	印 度	セ イ ロ ン	英 領 マレ	南アフリカ 聯邦	荷 領 東 印 度	ペ ル ギ
輸入 (一九三七年)	四六、三二八、六七四	八、〇四五、一三〇	一、九九〇、一八五	三、〇七七、六一六	八、九〇二、八六六	一、〇二三、六〇二	二、九〇〇、八四三	七、五三〇、五〇九	一、二四〇、九七四
輸入 (一九三六年)	四〇、四三五、五九〇	七、七二四、二六九	二、一四七、七八五	二、八七〇、二九〇	八、三九、七一七	九、〇三、四一九	二、五四、三三二	七、二一九、七八五	九、八二、一〇七
輸出 (一九三七年)	八六、三五九、八〇〇	二、二五〇、〇三三	七、一一〇、四九七	一、一〇四、六九二	八、七一、二二一	三、〇六三、七四〇	七、一三、三二六	一、四六七、七六五	五、六八五、八九七
輸出 (一九三六年)	六八、七二六、〇三一	一、九九三、五二二	六、六八一、九七五	一、九六五、三二九	一、三二六、五六八	一、九一一、二〇七	八、一三、三二六	一、三七九、六〇〇	五、五四六、五一四

フ ラ ン ス	九六四、五五四	一、〇二八、一三三	一、〇五五、六四七	九、三六、一〇九
ド イ ツ	四一七〇、六二四	四、〇五五、二一四	四、四一〇、四九八	三、六四七、三七六
ア メ リ カ 合 衆 國	一七、七五九、一七五	一四、六四八、六六七	一〇、八五九、六二二	一、九、五六三、三七六
日 本	五、三四九、〇八七	四、〇九三、一九一	三、九〇〇、〇九八	四、八六五、四六九
ソ ン	一、〇三三、〇〇八	一、二九、三四四	一、二二、二六二	三、七八、四六〇
イ タ リ	八四四、九八三	六八五、四五三	三、六四四、〇五八	一、二一、三二六
支 那	六〇一、八七〇	四六、五五九	六一六、五二〇	三、〇二二、五七一
埃 及	二七、六一六	二〇三、四九九	六四〇、七二七	六〇、一〇九
オ ラ ン ダ	六五六、一六一	七〇〇、七〇九	七七九、五一五	一、〇三八、六二七
ノ ル ウ エ ー	四、九五、五六〇	三七八、八〇八	五六、五七三	二五、二六三
ス エ ー デ ン	一、五五、三三三	九四六、七一八	四七三、六五七	六三七、〇三八
ス イ ス	八七三、六三九	九四〇、三二二	一、二三、一七三	一七八、五六〇

ノ、英貨價格

ス、オーストリア通貨

輸出入主要商 品 (一九三八年三月)

年次	輸 入 品	輸 出 品		總 計
		オーストラリア生産 その他生産	ホント	
一九三四年三月	七四、一九、四九 <small>ホント</small>	八八、一九七、九二 <small>ホント</small>	二、四五六、二一九 <small>ホント</small>	九〇、六五四、一四八 <small>ホント</small>
一九三五年三月	八五、二五三、四五八	一〇六、六三三、三七八	二、七五〇、〇二九	一〇九、三七三、四〇七
一九三六年三月	九三、六四〇、四六二	一二六、五〇一、五三四	三、一六三、七八四	一二九、六六四、三八
一九三七年三月	一一三、九七五、〇六〇	一三三、六七五、九四五	三、一六一、九三四	一三五、八三七、八七九
一九三八年三月	一〇三、二五六、五五二	一〇八、二八八、一六七	四、〇一三、二〇五	一一二、二〇一、三三二

輸	入	(英貨價格)
茶	二、四八三、八八三	
煙草及其ノ調劑	一、八六三、八八七	
ウイスキー	五五三、五三七	
ソックス、ストッキング	一、一四、五〇八	
飾紐及び裝飾品	三三五、九九五	
蓋布及びズツクノ反物	五六九、五八八	
木綿及リッネル	四、八七七、四七四	
絹及びビ混紡絹	三、六二四、一一八	
羊毛及び混紡羊毛品	二、八二一、二二	
加工絹、加工綿布等	五〇二、七八九	
紙、絹及び敷物	一、六六二、一二二	
床ノ敷物及びリッネル		

輸	出	(オーストラリア流通價格)
バター	一、二八九、八三七	
チーズ	一、〇七三、九三一	
卵	六六二、一七三	
肉	一、二七七、六三五	
ミルク及クリーム	七九一、〇一一	
果実 (乾)	三、八八四、六七六	
果実 (生)	三、〇二二、八一四	
果実及野菜 (水中漬)	一、二六七、〇七〇	
大豆	八、七三四、九七四	
麥粉	四、五四〇、二一〇	
ジャム及ゼリー	一、二六三、四四一	
獸皮及皮革	四、〇九四、七五四	
羊毛	四、三六三、九四一	

電機	燈	原	糸	靴	輸
機々機	油	油	人造絹糸、綿糸、毛糸等	ト、袋、物	入
四九一三一六八	六六、八九八	五、六五八、五三〇	一、〇三九、八三〇	一、五〇九、六一八	(英貨価格)

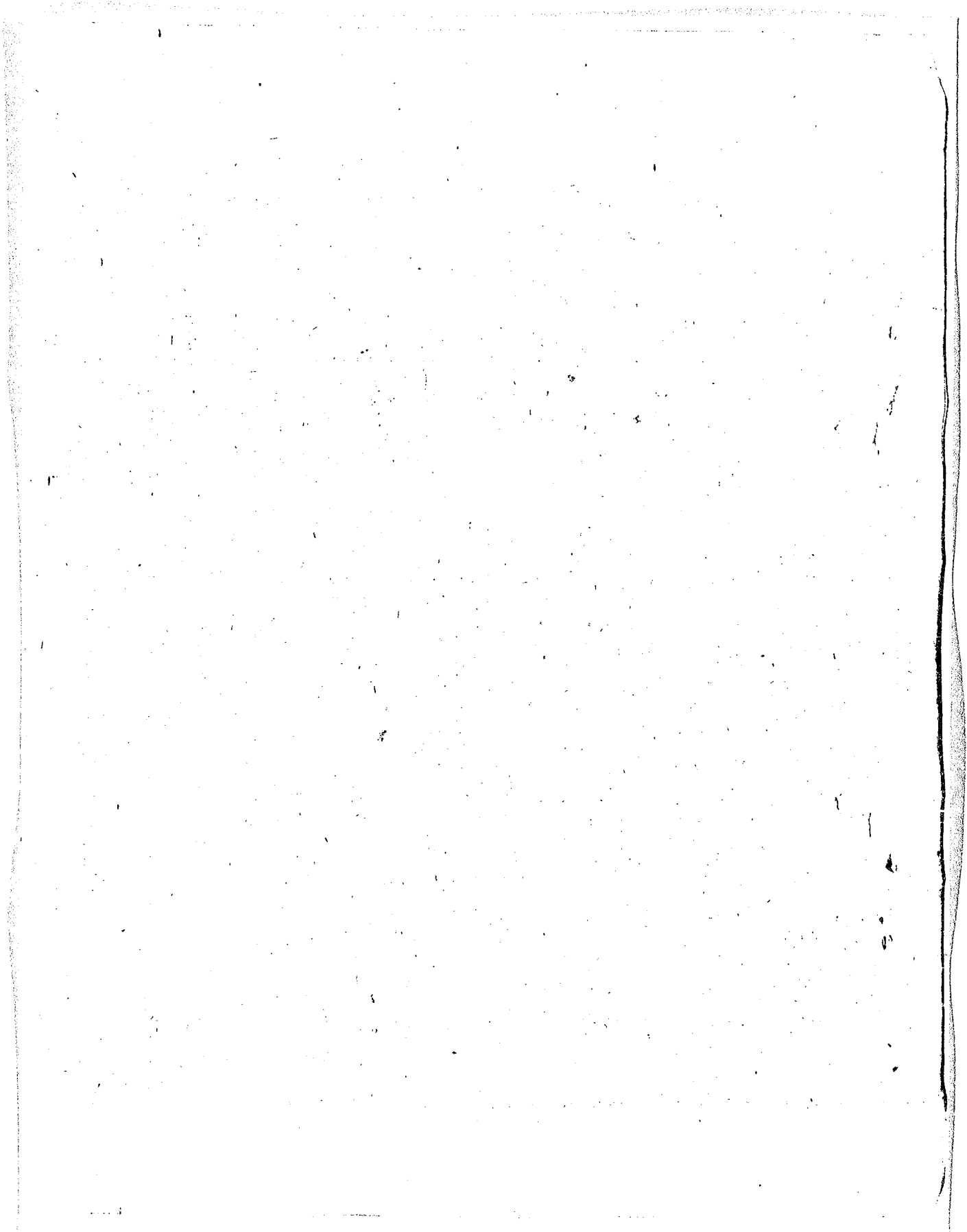
鉄及ビ鋼鉄板、金及薄板	自動車等、車台及車体	器具	輸
入	入	入	入
二、六一、七八九	七、五二、三八五	八、五三、三九五	(英貨)価格

鉄	金	原	輸	鞣皮	錫	鉛	銅	石	獸	輸
		木	出	出	(塊)		(塊及メタル)	炭	脂	出
九、九三、四八六	一、四、九五、八七三	一、九二、六、五〇四	(オーストラリア流通価格)	六、三五、六五八	三、七〇、一三七	四、二八、三、七三四	一、五、六五六	三、四七、〇五四	四、〇三、〇三四	(オーストラリア流通価格)

材 木 — 桐 木 シ カ ル 等	兵 器 、 彈 藥 及 爆 發 物	動 力 機 械	魚 網 結	滑 油	肥 料	樂 器 、 ピ ア ノ 等	藥	文 房 具 、 本 等	紙 、 印 刷 物	ガ ラ ス 及 ガ ラ ス 器	炭 木	ゴ ム 製 品	管 及 筒
二七〇、五六一	一〇八〇、一〇八	二四八三、八一二	八四六、二七六	七八〇、八六一	一、二七二、一五七	一七五、七六一	四、三二六、三九六	一、九〇八、六二九	二、七一〇、三三四	九〇三、三六〇	一、四八四、七六六	一、五四五、三六六	四、五七一、一四四

大 麥	葡 萄 酒	豆 類 珠 貝	煙 草	白 檀	砂 糖	亞 鉛	石 炭
三四一、九三五	九十九、一七九	二四四、二六六	二一七、七四六	四三、三三〇	四一、八〇、六二六	八八、五三四	七四、五九四

輸		入		價格(英貨)	
粗麻及黃麻ノ反物	塗料及細藥	鉉金製品及反物	獸皮及皮草	纖維—亞麻纖維、パンマ綿	
四四七、四七七	五八只七四五	五二四、四八七	六九五、六七三	八九七、七五五	





借り出したときは

- 本は大切に保管しましょう。
- 必ず期日を守りましょう。
- よごさないようにしましょう。
- 折目をつけないようにしましょう。
- また貸しをやめましょう。